兵庫県文化財調査報告　第494冊

兵庫県古代官道関連遺跡
調査報告書Ⅲ

平成 29(2017)年 3 月

兵庫県教育委員会

兵庫県古代官道関連遺跡
調査報告書Ⅲ

平成29(2017)年3月

兵庫県教育委員会

例　言

1　本書は、兵庫県立考古博物館の研究テーマの１つである「兵庫県内における古代官道に関する調査研究（第Ⅱ期）」に伴う報告書で、文化庁より補助金の交付を得ている。

2　調査は、平成25年度に発掘調査と分布調査、平成26年度に発掘調査と分布調査、平成27年度に発掘調査と出土品整理作業、平成28年度に出土品整理作業と報告書作成を実施した。

3　調査の進行にあたっては、古代官道調査委員会を組織し、調査の各段階で委員会における検討を加えた。委員会の委員は、坂井秀弥（会長、奈良大学）、玉田芳英（独立行政法人奈良文化財研究所）、馬場　基（同前）、木本雅康（長崎外国語大学）の４氏に委嘱した。

4　本書の図版に示す方位は国土座標第Ⅴ系に則っており、座標値は世界測地形である。水準高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした海抜高度である。

5　本文については篠宮　正・鐵　英記・池田征弘が分担執筆した。文責については目次に表記している。編集は篠宮の指示を受け、鐵が担当した。

6　本報告にかかわる遺物・写真・図面は、兵庫県立考古博物館が管理・保管している。

7　調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。

上田哲也、大谷輝彦、大塚重之、大塚健洋、岡本敏明、川岸　龍、岸本道昭、黒田祐介、鴻坂　仁、小柴治子、是川武士、是川　長、崎谷真治、崎谷真也、崎谷博保、篠本忠美、嶋坂　登、島田 拓、岡　梓、田中幸夫、中川　猛、中溝康則、西野　望、白谷朋世、福井　優、増田倫敏、萬代和明、南　憲和、森岡秀人、森　恒裕、山本和子、山本博利、
たつの市教育委員会、姫路市太市中自治会、姫路市教育委員会、姫路市向山自治会
（敬称略、五十音順）

目　次

例言

第１章　調査研究の契機と経過（篠宮）

第１節　調査の趣旨 …… 1

第２節　第Ⅰ期の調査 …… 2

第３節　第Ⅱ期の調査 …… 2

第４節　第Ⅲ期の調査 …… 3

第２章　大市駅家と向山遺跡（篠宮）

第１節　文献等に記載された邑智〔大市〕駅家 …… 7

第２節　「揖保郡大市」の環境 …… 7

第３節　従来の大市駅家および大市駅家周辺の駅路の研究 …… 11

第４節　行政資料に見る向山遺跡と大市駅家 …… 12

第５節　向山遺跡の既往の調査 …… 14

第６節　分布調査及び地籍図調査の成果 …… 14

第７節　地域での取り組み …… 17

第３章　第Ⅲ期の調査経過

第１節　平成25年度の調査（篠宮） …… 19

第２節　平成26年度の調査（篠宮） …… 19

第３節　平成27年度の調査（鐵） …… 20

第４節　平成28年度の調査（鐵） …… 20

第４章　向山遺跡の調査成果

第１節　調査の概要（篠宮） …… 21

第２節　発掘調査の成果

１．平成25年度（篠宮） …… 21

２．平成26年度（篠宮） …… 24

３．平成27年度（鐵） …… 32

４．SK501・SK502出土石材の鑑定（パリノ・サーヴェイ） …… 37

第３節　出土した遺物

１．土器（篠宮・鐵） …… 40

２．瓦（池田） …… 46

第５章　調査研究成果

第１節　向山遺跡の出土の瓦（池田） …… 62

第２節　向山遺跡の遺物散布状況からみた大市駅家の推定（篠宮） …… 68

第３節　大市駅家と山陽道駅路の復元（篠宮） …… 69

第４節　大市駅家調査と今後の課題（篠宮） …… 71

写真図版

報告書抄録

表 目 次

第１表　平瓦の出土個体数 …… 47
第２表　出土遺物（土器・鉄製品・木製品）一覧表（１） …… 59
第３表　出土遺物（土器・鉄製品・木製品）一覧表（２） …… 60
第４表　出土瓦一覧表 …… 61
第５表　長坂寺式軒瓦の出土遺跡 …… 65
第６表　平瓦タタキ目の出土比率 …… 66
第７表　向山遺跡出土遺物統計 …… 68

図 目 次

第１図　播磨国内の古代官道と駅家 ……１
第２図　大市中古墳群 ……８
第３図　向山遺跡と周辺の遺跡 ……９
第４図　西脇丸山２号墳 ……10
第５図　破盤神社西古墳 ……10
第６図　西脇古墳群 ……10
第７図　西脇廃寺塔芯礎 ……10
第８図　大市駅家および駅路の研究 ……13
第９図　行政資料に見る向山遺跡と大市駅家 …15
第10図　邑智駅跡石碑 ……17
第11図　向山遺跡の調査区配置 ……22
第12図　１区　平面・土層断面 ……23
第13図　２区　平面・土層断面 ……25
第14図　２区　溝SD201・202平面・土層断面 …26
第15図　３区　平面・土層断面 ……27
第16図　３区　瓦だまりSK301平面 ……29
第17図　４区　平面・土層断面 ……30
第18図　４区　溝土層断面 ……31
第19図　５区　平面・土層断面 ……33
第20図　５区　遺構平面・土層断面１ ……34
第21図　５区　遺構平面・土層断面２ ……36
第22図　SK501・502出土石材の肉眼鑑定 ……39
第23図　１区　出土遺物 ……40
第24図　２区　出土遺物 ……40
第25図　３区　出土遺物 ……42
第26図　４区　出土遺物 ……43
第27図　５区　出土遺物 ……44
第28図　木製品 ……45
第29図　タタキ目の分類 ……47
第30図　瓦１（２区・３－１区） ……50
第31図　瓦２（３－１区） ……51
第32図　瓦３（３－１区） ……52
第33図　瓦４（３－１区） ……53
第34図　瓦５（４－１区） ……54
第35図　瓦６（５区） ……55
第36図　瓦７（５区） ……56
第37図　瓦８（５区） ……57
第38図　瓦９（５区） ……58
第39図　向山遺跡出土の軒瓦 ……62
第40図　長坂寺式軒瓦の出土例（１） ……63
第41図　長坂寺式軒瓦の出土例（２） ……64
第42図　大市駅家駅館院・古代山陽道駅路復元図 …70

写真図版目次

写真図版１　航空写真
写真図版２　航空写真
写真図版３　１区
写真図版４　２区
写真図版５　２区
写真図版６　２区
写真図版７　２区　遺物
写真図版８　２区　遺物
写真図版９　２区　遺物
写真図版10　３区
写真図版11　３区
写真図版12　３区
写真図版13　３区　遺物
写真図版14　３区　遺物
写真図版15　３区　遺物
写真図版16　３区　遺物
写真図版17　３区　遺物
写真図版18　３区　遺物
写真図版19　４区
写真図版20　４区
写真図版21　４区　遺物
写真図版22　４区　遺物
写真図版23　調査状況
写真図版24　調査状況
写真図版25　５区
写真図版26　５区
写真図版27　５区
写真図版28　５区
写真図版29　５区
写真図版30　５区
写真図版31　５区
写真図版32　５区
写真図版33　５区
写真図版34　５区
写真図版35　５区
写真図版36　５区　調査状況
写真図版37　５区　遺物
写真図版38　５区　遺物
写真図版39　５区　遺物
写真図版40　５区　遺物
写真図版41　５区　遺物

第１章　調査研究の契機と経過

第１節　調査の趣旨

平成19年10月に開館した兵庫県立考古博物館は、その事業計画の一つの柱として、調査研究を通じて「地域文化の成り立ちを解明し、新たな地域像を創りだすため、総合的・学際的な体制による調査研究を推進し、その成果を発信・活用する」ことを掲げた。そうした目標に沿った調査研究事業の個別研究分野を設定するにあたり、兵庫県全域をエリアとし、県下市町との連携を図りながら進めることができる課題として「兵庫県内における古代官道に関する調査研究」を研究テーマに選定した。

山陽道・山陰道・南海道という３本の主要な古代官道が県内を通る兵庫県にとって、「交通・交流」は地域文化を解くキーワードであり、最もふさわしいテーマであると考えた。特に山陽道は兵庫県内において、摂津地域と播磨地域の広い範囲で明瞭に痕跡を残している。

従来、古代官道や駅家の研究は発掘調査によらない考古学的研究や地理学的研究、つまり文献研究が中心であった。昭和60年度以降のたつの市小犬丸遺跡の発掘調査で、布勢駅家の実態が明らかになった。その後、上郡町落地遺跡の発掘調査では野磨駅家の実態が明らかになり、平成18年に「山陽道野磨駅家跡」として史跡に指定された。このように兵庫県における古代官道や駅家の調査・研究は全国をリードしている分野であり、これには『播磨国風土記』の存在が大きい。

こうした好条件に恵まれる一方、山陽道の上記以外の駅家についての実態は明らかでなく、さらに山陰道・南海道の駅家にいたっては、断片的に関連資料が知られているにすぎない。そこで、これまで研究されてきた成果の蓄積を活かしながら、古代官道に関する調査研究をすすめることにより、さらなる古代官道・駅家の実態が明らかになると考えられる。

第１図　播磨国内の古代官道と駅家

第２節　第Ⅰ期の調査

第１期調査では、県下を通る山陽道・山陰道・南海道という３本の主要な古代官道とその支路を分布調査するとともに、関係する各市町教育委員会に取材して、古代官道と駅家推定地の現状把握を行った。古代官道という題材は、県下の各市町と連携を図りながら進める上で格好の研究テーマとなった。

次いで、実際に調査を行うフィールドとして「賀古駅家」とされる加古川市古大内遺跡と、仮称「邑美駅家」とされる明石市長坂寺遺跡という２箇所の駅家推定地を選定した。両地点は県下の駅家の中で考古博物館に最も近く、調査対象範囲も限定できるという利点が揃っていた。平成19年度には、空中写真測量によって両遺跡の地形図を作成したところ、以前から方形地割の存在が知られていた古大内遺跡に加えて、長坂寺遺跡においても正方位の地割がＬ字状に認められることが判明した。

平成20年度からは、古代官道の調査を本格的に着手するにあたり、兵庫県内の古代官道の調査と保護活用の方法の検討を目的とした「古代官道調査委員会」を組織し、山中敏史（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所）、馬場　基（同前）、木本雅康（長崎外国語大学）の３名の学識経験者に委嘱した。

平成20・21年度には古大内遺跡と長坂寺遺跡で地中レーダー探査を行い、地下の状況の間接映像を作成した。その情報をもとに、古大内遺跡で平成20年度と平成21年度の２度にわたる確認調査を実施した。その結果、古代山陽道の側溝と、山陽道から「賀古駅家」へ向かう進入路、駅館の築地側溝などを検出し、山陽道に面した東側に駅家の入口を特定するという大きな成果を得た。

調査に対する関心は高く、平成21年３月28日の現地説明会には378人、同年７月20日の現地説明会には250人の参加者があった。平成22年３月20日には考古博物館講堂において公開講座「徹底討論・どこまで見えた!?古代の道と駅家」を開催し、賀古駅家の駅子集落といわれる加古川市坂元遺跡の調査成果を加えた、山陽道の駅家研究の最前線を提示した。

平成21年度末には、平製19年度から平成21年度までの成果をまとめた「兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ」（兵庫県文化財調査報告第384冊）〔兵庫県立考古博物館2010〕を刊行し、第Ⅰ期の事業を終了した。

第３節　第Ⅱ期の調査

平成22年度から３箇年計画で、第Ⅱ期調査を開始した。「古代官道調査委員会」は第Ⅰ期の委員に、坂井秀弥（奈良大学）を加えた４名に委嘱した。

平成22年度の調査は仮称「邑美駅家」と推定される長坂寺遺跡の、遺構の存在や内容を確認するための発掘調査を行った。第１回の古代官道調査委員会を平成23年１月15日に開催し、第Ⅱ期調査の方針と、当年度調査の計画を審議した。

発掘調査は平成23年１月25日～３月11日の28日間で実施した。調査の結果、駅家に関する遺構について大きな発見があり、３月６日の現地説明会には約300名の参加者があった。調査期間中の３月５日に現地で開催した第２回の古代官道調査委員会では、長坂寺遺跡の調査の指導・検討を中心議題とした。

その他、次年度以降の調査を見据えて、古代山陽道の痕跡が残るとされている城地地区（加古郡播磨町野添城２丁目）付近の１／500地形測量図を、平成19年度に撮影した空中写真をもとに作成した。

平成23年度の調査は、11月１日に開催した第１回の古代官道調査委員会で調査の計画を審議した。委員会では、築地痕跡の可能性が指摘されていたＡ－２区南辺の農道部分の調査の必要性が強く打ち出された。これにより、

農道と南側の畑地についての部分的な調査計画をたてた。

確認調査は平成24年２月16日から20日までの５日間で、農道を断ち割る確認調査を行った。期間中の２月19日には第２回の委員会を現地にて開催した。内容は長坂寺遺跡の調査の指導・検討および次年度以降の事業計画などが中心議題で、次年度以降の調査方針として、古代官道関連遺跡の対象エリアを現段階ではあまり拡大させずに、まずは播磨の山陽道に絞って実績を積み上げていくという方向性が打ち出された。

また、長坂寺遺跡の出土品整理作業（遺物の洗浄など）を実施した。さらに、次の調査対象として念頭に置いている「大市駅家」（姫路市向山遺跡）付近を起点に、古代山陽道のルートがよく遺存している『布勢駅家』（たつの市小犬丸遺跡）までの区間について、空中写真撮影を行った。

平成24年度は、長坂寺遺跡の出土品の整理作業を行うとともに、次年度以降の第Ⅲ期調査を計画している「大市駅家」に関係する、姫路市太市中に所在する向山遺跡の予備調査を実施した。

平成25年１月26日に古代官道調査委員会を開催し、長坂寺遺跡の調査報告内容の検討と、「兵庫県内における古代官道に関する調査研究」の第Ⅲ期調査の事業計画についての審議を行った。この結果、第Ⅲ期事業として「大市駅家」の本格的な調査を進める事となった。

年度末には『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅱ』（兵庫県文化財調査報告第455冊）を刊行〔兵庫県立考古博物館2013〕し、第Ⅱ期の事業を終了した。

第４節　第Ⅲ期の調査

平成25年度からは３箇年の計画で古代官道の調査の第Ⅲ期事業を開始した。

「古代官道調査委員会」は第Ⅱ期の委員長山中敏史が勇退し、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の玉田芳英氏を加えた４名で組織した。委嘱した委員は下記のとおりである。

会長　坂井秀弥（奈良大学）：考古学
委員　玉田芳英（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）：考古学
委員　馬場　基（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）：文献史学
委員　木本雅康（長崎外国語大学）：歴史地理学

１．平成25年度の調査

第Ⅲ期の調査は、平成24年度の第２回の古代官道調査委員会において、「兵庫県内における古代官道に関する調査研究」の第Ⅲ期調査の事業計画についての審議を行い、揖保郡の大市駅家の調査を行う事が決定した。

調査は、過去における調査、考古学的な分布調査、地理学的な分布調査を実施した上で、実際に確認調査（発掘調査）を実施することとした。大市駅家調査に先立ち、地元自治体にあたる姫路市教育委員会に協力依頼を出すとともに、調査対象となる太市中自治と向山自治会に対して協力依頼を出した。また、各公民館において12月１日（日）の姫路市の全市一斉清掃終了後に住民説明を行い周知した。その後、発掘調査場所を決定するために詳細な分布調査を実施した。

最近の調査研究の進展に伴い駅家は駅路に接して設置されていることが判明しており、駅路を確定することが、駅家の場所の特定する一つの条件となっている。播磨国内の山陽道駅路の推定は条里の余剰帯などの研究により進んできているが、桜峠から槻坂の間の大市駅家周辺の駅路は確定していないことが、未だ大市駅家が確定できていない原因であると言える。近年、桜峠から槻坂の間の大市駅家周辺の駅路は二つの説が提示されている。

一つは山麓を最短距離で結ぶ説、もう一つは斜行する現道と大字界を通る説である。

そこで、分布調査を実施するとともに、地籍図の調査や地元の人に聞き取りを行ったところ、斜行する現道は昭和８年に新たに作られた道であることが判明した。また、合わせて桜峠から槻坂の間の大市駅家周辺の表層地割りの検討を行ったところ、約４度西偏する揖保郡条里地割と正方位地割、桜峠と大市の山裾を最短距離で結ぶ方向の地割、槻坂と大市山裾を最短距離で結ぶ方向の地割の大きく４種類が存在することが判明した。古代官道の設置原則の一つに直進性と最短性がある。このため、山陽道の駅路は山裾を最短距離で結ぶ説をとり、初年度は山陽道の駅路を解明するための調査区（向山遺跡の範囲内）を設定することとした。山陽道の推定駅路にあたる休耕田を調査対象として交渉にあたり、２箇所の調査箇所を決定した。

本来、発掘調査に先立って、古代官道調査委員会を開催し、調査方針や調査場所の決定経緯などについて審議すべきであったが、日程調整がつかず、個別に説明し、了解を得て調査を進めることとなった。

発掘調査は平成26年２月４日～２月22日の13日間で実施した。調査は学芸課の篠宮が担当し、調査補助員として小谷義男が参加した。発掘・埋め戻し作業に関わる機械掘削や人力掘削は安西工業株式会社に作業委託した。また、兵庫県立考古博物館ボランティアの萬代和明・増田倫敏・川岸龍の参加を得た。

調査開始時に報道機関等に対して、向山遺跡（大市駅家推定地）の発掘調査を実施すること、期間中に説明会を実施することについての情報提供を行い、調査期間中は随時取材の対応を行うことにした。平成26年２月13日には神戸新聞社の取材があり２月15日の現地説明会当日の朝刊に記事が掲載された。また、現地説明会には読売新聞社の取材があり、翌２月16日に記事が掲載された。さらに２月21日に神戸新聞社の取材があった。

調査の結果、山陽道駅路に関する遺構についての発見があり、２月15日の現地説明会には小雨にもかかわらず約30名の参加者があった。

調査期間中に予定していた古代官道調査委員会の開催は、日程調整がつかず、各委員に個別に発掘現場を見学していただき、指導を受けることとなった。このため、平成26年度は早期に古代官道調査委員会を開催し、平成25年度の調査結果を報告し、平成25年度以降の調査方針を決定するよう求められた。

２．平成26年席の調査

平成26年度の現地調査に先立って、第１回の古代官道調査委員会を６月15日に開催した。急遽公務で欠席の玉田芳英委員を除く坂井秀弥、木本雅康、馬場基の３名の委員と、主管課である県教育委員会文化財室の小川弦太主査、事務局として当館からは石野博信館長、深井明比古事業部長、学芸課の村上賢治課長・篠宮正、それにオブザーバーとして姫路市教育委員会文化財課の大谷輝彦文化財担当係長が出席した。

議事の内容は、平成25年度の分布調査等事前調査の成果報告と確認調査の成果報告を行った。さらに、平成26年度以降の調査方針との平成26年度の調査計画について審議した。

分布調査等事前調査の成果報告は、「大市駅家周辺の遺跡」、「従来の大市駅家や周辺駅路の調査研究の概要」、「大市駅家と想定されている向山遺跡の行政資料の変遷」、「向山遺跡の調査履歴」、「地籍図の調査成果」を報告するとともに、以上の成果から、大市駅家周辺における古代山陽道駅路の推定を行った。

この山陽道駅路推定をもとに、平成25年度は確認調査箇所を決定したことを説明した。

さらに平成26年度の調査方針は、さらなる古代山陽道駅路の確定を目指す方向と、大市駅家本体の調査の必要性も説かれた。駅路を確定する調査については、大津茂川東側についても調査をする案があったが、限られた経費と日程で有効な調査を進めるため、最終的には駅家推定地と駅家推定地と合わせた山陽道駅路の調査の二箇所で調査を実施することに決定した。また、発掘調査の計画については、あまり遅くならない時期にするように指

摘を受けた。

この委員会の審議結果をもとに、調査計画および地元交渉を行い、３区と４区の調査地を決定し、土地所有者の承諾を得た。

発掘調査は平成26年12月５日～12月25日の14日間で実施した。調査は主として学芸課の篠宮が担当し、村上・山上が加わった。調査補助員として小谷義男が参加した。発掘・埋め戻し作業に関わる機械掘削や人力掘削は安西工業株式会社に作業委託した。また、兵庫県立考古博物館ボランティアの萬代和明・増田倫敏・川岸龍の参加を得た。

調査開始前に報道機関等に対して、向山遺跡（大市駅家推定地）の発掘調査を実施すること、期間中に説明会を実施することについての情報提供を行い、調査期間中は随時取材の対応を行うことにした。平成26年12月18日には神戸新聞社の取材があり12月19日に記事が掲載された。

12月20日には現地説明会を開催し、雨にもかかわらず、約54名の参加者があった。

調査期間中の12月18日に現地で開催した第２回の委員会は、木本雅康委員を除く坂井秀弥、玉田芳英、馬場基の３名の委員と、主管課である県教育委員会文化財室の中村弘主査、事務局として当館からは石野博信館長、深井明比古事業部長、学芸課の村上賢治課長・山上雅弘・篠宮正、それにオブザーバーとして姫路市教育委員会文化財課の大谷輝彦文化財担当係長が出席した。議題は向山遺跡の調査の指導・検討を中心とした。ただし、木本委員は当日の出席が叶わなかったので、前もって12月20日に現地指導に来ていただいた。

平成26年度までの発掘調査で大市駅家付近の古代山陽道駅路の経路が判明し、大市駅家駅館院の位置も推定できたが、駅館院の中心部の発掘調査が行われていないため、調査の必要性が指摘された。このため、現地での発掘調査を平成27年度まで１年延長し、平成28年度に報告書を刊行することとした。この方針に従って、平成27年度に発掘調査予定地の地権者に発掘交渉をすすめ、快諾を得られた。

なお、平成26年４月19日から６月22日にかけて、兵庫県立考古博物館特別展「古代官道　山陽道と駅家」を開催し「古代官道調査研究事業」の古代山陽道における発掘調査の成果の位置づけを行った。また平成26年９月20日から11月24日にかけて、上郡町郷土資料館において兵庫県立考古博物館ふるさと発掘展「古代山陽道と野磨駅家」を開催して古代官道調査研究事業の成果の一部を公表し播磨における発掘調査の成果の位置づけを行った。

３．平成27年度の調査

調査地点については前年度の委員会で審議審議がされていたため、発掘調査を平成27年10月15日～11月11日の20日で実施した。調査は学芸課の山上・鐵が担当した。発掘・埋め戻し作業に関わる機械掘削や人力掘削および遺構実測は有限会社松浦興業に作業委託した。また、兵庫県立考古博物館ボランティアの増田倫敏の参加を得た。

調査期間中の11月30日に現地で古代官道調査委員会を開催した。公務で欠席の馬場基委員を除く坂井秀弥、玉田芳英、木本雅康の３名の委員と、主管課である県教育委員会文化財室の垣内拓郎主任、事務局として当館からは学芸課の村上賢治課長・山上雅弘・鐵英記、それにオブザーバーとして姫路市教育委員会文化財課の大谷輝彦文化財担当係長が出席した。議題は向山遺跡の調査の指導・検討を中心とした。礎石の可能性がある石が２カ所で見つかったことから、調査地点が駅館院である可能性が高まったという評価は得たが、建物配置については不明な点が多いとの指摘を受けた。

また、11月30日には姫路市立太市小学校６年生および引率者計20名の現場見学を受け入れた。11月１日に現地説明会を開催し、100名の参加があった。

４．平成28年度の調査

平成28年度は報告書刊行を事業の中心においた。学芸課の篠宮・鐵が担当し、遺物の接合・復元、実測及び図面の整理・トレースについては専従する職員として柏原美音を雇用した。遺物写真の撮影については学芸課岡田章一が行い、柏原が補佐した。

平成28年10月21日に第１回古代官道調査委員会を開催した。坂井秀弥委員長、馬場基委員の２名の委員と、主管課である県教育委員会文化財室の垣内拓郎主任、事務局として当館からは学芸課の藤田淳課長・山上雅弘・篠宮正・鐵英記・足立望、それにオブザーバーとして姫路市教育委員会文化財課の大谷輝彦文化財担当係長が出席した。整理作業の途中経過を報告するとともに、報告書掲載予定資料を委員およびオブザーバーに実見していただき、ご教示・ご助言を得た。また、次年度以降の当事業について、委員からは兵庫県を特徴付ける遺跡の研究事業として継続することが望ましいとの提言があった。第２回の調査委員会で館としての方針を出し、さらに委員のご意見を伺うこととなった。

平成29年３月10日に第２回古代官道調査委員会を開催した。坂井秀弥委員長、玉田芳英委員・馬場基委員・木本雅康委員の４名の委員、主管課である県教育委員会文化財室の垣内拓郎主任、事務局として当館からは和田晴吾館長、学芸課の藤田淳課長・山上雅弘・篠宮正・鐵英記・足立望、それにオブザーバーとして上郡町教育委員会教育総務課の島田拓学芸員が出席した。次年度については、平成19年度に行った県内駅家推定地の分布調査を報告書としてまとめることになった。また、第Ⅳ期事業として辻ヶ内遺跡（上郡町：高田駅家比定地）を調査対象とする方針を決定し、来年度についてはその調査内容・スケジュール等に関する地元教育委員会との協議を行っていくこととなった。

なお、年度末には報告書（本書）を刊行し、第Ⅲ期事業を終了した。

第２章　大市駅家と向山遺跡

第１節　文献等に記載された邑智〔大市〕駅家

邑智駅家あるいは大市駅家についての文献で最も古い記述は『播磨国風土記』三条西家本の揖保郡条に「邑智驛家」「大内」と記載されている。「邑智驛家」の続きに土品記事が書かれているので、本来は「邑智里」か。「大内」と名付けたのは、品太天皇が巡行した時に「狭い土地だと思っていたが、来てみるとここはひろびろとしたところだなあ」と言ったからだとしている。

『延喜式』巻二十八の兵部省、播磨國驛馬には「大市…各廿疋」と記載されており、当時播磨国に存在していた９箇所の駅家のうちの一つで、駅馬は20匹配置していたとある。

『和名類聚抄』巻八の郡郷部に「大市　於保知」とあり、巻十の居處部に山陽驛「大市」と播磨国に存在していた９箇所の駅家の一つとして記載されている。

大市駅家や古代山陽道ではないが、嘉暦４年（1329）の『法隆寺領播磨国鵤荘絵図』の北東端には山名として「馬山」が記載されている。また、鵤荘の北東側に接して「大市郷」が記されており、古代大市郷の範囲推定に役に立つ。大市郷と太田荘の間には西側の鵤荘内をまっすぐ東西方向に「筑紫大道」が描かれている。このことは、古代から中世の山陽道の変遷を考える上で重要である。

第２節　「揖保郡大市」の環境

１.「大市」地域の地理的環境

「大市」地域は、明治22年に市町村制が施行され、揖保郡の石倉村、相野村、太市中村、西脇村が合併し、元の郷名を採り揖東郡太市村となり、明治29年からは揖保郡太市村となった。昭和29年に姫路市に編入された。ここは姫路市の西端に位置し、播磨灘に注ぐ大津茂川中流域の山塊で囲まれた範囲を指す。水系的には大津茂川上流域の姫路市林田町上伊勢、下伊勢も含められると考えられるが、『播磨国風土記』に林田里の中に伊勢野が出てきており、現在も伊勢は太市地区とは別地区である。言い換えると、五十戸で編成された古代の里が現在まで踏襲されていると考えられる。時代はやや下るが、『法隆寺領播磨国鵤荘絵図』の記載によると、馬山の南端あたりが境界となり、大津茂川流域では太田荘（古代の太田里）が境界になり、馬山西側では鵤荘が境界となっている。

したがって、現在の地名でいう姫路市太市中・相野・石倉・西脇、太子町松尾・広坂・鵤荘が「大市」地域の領域と言える。つまり峰相山を北端として姫路市林田町下伊勢と姫路市打越と接している。東は峰相山から南に伸びる尾根から桜峠を経て城山山塊に至る稜線を境として姫路市打越と姫路市飾西に接している。西は峰相山から南南西に伸びる山塊から石倉で大津茂川を渡り、西脇の北側の山塊を経て槻坂から松尾山にかけての山の稜線で林田川流域と接している。南端は平野部に広がるため、山の境界ではなく、水田地域の条里が境界となる。

なお、古代山陽道駅路通過推定の桜峠西側には明治期の大日本帝国陸地測量部作成の地図を見ると３箇所のため池が存在していたが、現在は桜山貯水池が築かれている。これは日本製鐵広畑製鉄所の工業用水確保のため昭和15年に着工され、戦時中の資材不足のために昭和20年５月に中断したが、昭和35年11月に堰堤のかさ上げ工事が開始され昭和37年３月に現在の姿で完成した。

現在の主要な道路は南北方向に一般県道石倉太子線と国道29号の姫路西バイパスが走り、東西方向に姫路と上

郡を結ぶ主要地方道姫路上郡線が走っているほか、山陽自動車道が東西方向に走り姫路西インターチェンジが置かれている。また、鉄道は東西方向に姫路と津山・新見を結ぶJR姫新線（旧日本国有鉄道姫津線）が走り、昭和６年（1931）に太市駅が開業した。このように「大市」地域は交通の要衝であると言える。

２．考古資料からみた「大市」地域の歴史的環境

「大市」地域の歴史的環境について発掘調査が行われた遺跡を中心に見ていく。当該地域は決して発掘調査例が多いとはいえないが、弥生時代から中世に至るまで多くの遺跡が調査されている。

大市地区の南側に隣接する亀田遺跡は弥生時代中期から後期初頭にかけての30棟以上の竪穴住居や土器棺墓などを調査し、分銅形土製品、銅剣形石剣などが出土している〔兵庫県教委2001ab〕。弥生時代後期では、芝添遺跡で土坑の調査が行われている〔兵庫県教委2013〕他は、調査例がない。

古墳時代前期の集落は亀田遺跡で３棟の竪穴住居を調査している。墳墓は湯ノ谷墳丘墓があり、竪穴式石槨を埋葬施設とする。

古墳時代中期の集落は亀田遺跡で竪穴住居５棟や水田を調査し、角杯や子持勾玉などの遺物が出土している。墓は西脇古墳群Ｅ支群の４基が中期である。このうち75号墳で初期須恵器の甕が棺内に敷かれた例があり、須恵器生産との関係が指摘されている。初期須恵器は今回の向山遺跡の発掘調査でも出土している他、以前にも表面採集されている。このことは向山遺跡との関係や、古墳時代後期から古代にかけて拡大する須恵器生産の先駆けとして注目される。

第２図　大市中古墳群

古墳時代後期の集落は、芝添遺跡、亀田遺跡で発掘調査が行われている。芝添遺跡では溝を調査し、亀田遺跡では15棟の竪穴住居を調査している。

古墳時代後期の墓は太市中古墳群、西脇丸山２号墳、西脇古墳群、破盤神社西古墳等があり、太市中古墳群、西脇丸山２号墳、西脇古墳群で調査が行われている。いずれも横穴石室を埋葬施設とする円墳である。

1　古代美作道跡　2　寄井遺跡　3　古代山陽道跡　4　迫分古墳　5下伊勢西山古墳　6　ドンデン古墳群　7　下伊勢古墳　8　下伊勢古墳群　9　百坪遺跡　10　山ノ鼻遺跡11西奥谷窯跡　12　無奥谷窯跡　13　大谷窯跡　14　藤谷窯跡　15　カメヤキ谷窯跡　16　大谷山古墳　17　打越２号窯跡　18輪崎古墳　19　鶏足寺跡　20　峰相口窯跡群　21　峰相池遺跡　22　峰相大池遺跡　23　赤坂窯跡群　24　観音寺古墳群　25　棚池遺跡　26　観音寺窯跡群　27　笠松城跡　28　観音寺遺跡　29　後瀬遺跡　30　破盤神社西古墳　31　西脇古墳群　32　西脇廃寺　**33　向山遺跡（太市駅家跡）**　34　鷹の子池遺跡　35　西脇丸山古墳群　36　鹿脇墳丘遺跡　37　畑井山遺跡　38　大池窯跡群　39　口池ノ崎古墳　40　殿清水池窯跡　41　御坊ヶ山１号窯跡　42　太市中古墳群　43　芝添遺跡　44　境谷遺跡　45　広坂古墳群　46　笹山墳墓群　47　松尾寺跡　48　松尾遺跡　49　向池遺跡　50　北山古墳　51　鵜飼古墳群　52　平方遺跡　53　甕筆池遺跡　54　亀田遺跡　55　内山戸古墳群　56　上太田古墳群　57　植岩城跡　58　桜峠窯跡群　59　青山窯跡群

周辺の遺跡一覧

第３図　向山遺跡と周辺の遺跡

太市中古墳群は向山遺跡の南東700mに位置する古墳群で20基確認されており、このうち12基の調査が行われた。６世紀中葉から７世紀初頭の古墳群である〔兵庫県教委2003〕。西脇丸山２号墳は向山遺跡の西900mに位置する円墳で６世紀末に位置づけられる〔兵庫県教委2011〕。破盤神社西古墳は発掘調査が行われていないが、向山遺跡の北北東約800mに位置する７世紀の単独墳で巨石を使った横穴式石室が知られる〔中濱2013〕。西脇古墳群は向山遺跡の北西700mから西北西1.2kmの山麓に立地する大規模な終末期古墳群で、Ａ～Ｆの６支群、134基以上からなり、中期も含めて92基が調査されている〔兵庫県教委1995〕。

古代において、向山遺跡周辺は播磨国揖保郡に含まれている。播磨国の国府、国分寺などは東隣の飾磨郡に所在していた。古代官道は山陽道が桜峠から槻坂を越えて通っており、山陽道から分岐する美作道も大市里内の北部を通過すると考えられている。大市駅家は向山遺跡が考えられている。

古代の集落遺跡は亀田遺跡で奈良時代の掘立柱建物を10棟以上、平安時代の掘立柱建物を10棟以上調査している。古代の墓では西脇古墳の中で火葬墓を４基、太市中古墳群の中で平安時代の木棺墓を調査している。

西脇廃寺は塔心礎が残っており、古代瓦が周囲に散布しているが伽藍の復原は不可能である〔鎌谷1942・姫路市史編集委員会1970・今里2010a〕。周囲で小規模な発掘調査が行われ、方形掘形の柱穴が見つかっている〔小柴2002〕。向山遺跡中心の揖保郡条里方向の北、約380mに位置していることから、強い関連性が指摘できる。峰相山鶏足寺でも古代の瓦が採集されている〔今里2010b〕。

大市地区と東隣の飾磨郡の間に広がる桜峠から峰相山周辺の約５kmの間の山地には、６世紀中頃から８世紀にかけての須恵器等の窯跡が多数知られ、峰相山窯跡群と総称されている。峰相口窯跡群、赤坂窯跡群、観音寺窯跡群、大池窯跡群、殿清水池窯跡、御坊ヶ山１号窯跡、桜峠窯跡群等が大市地区に存在している。上伊勢１号窯、上伊勢２号窯は揖保郡林田里に推定され、打越奥山窯跡群、西奥谷窯跡、無奥谷窯跡、大谷窯跡、藤谷窯跡、打越２号窯跡は飾磨郡側に存在している。発掘調査が行われた御坊ヶ山１号窯跡では、円面硯等の特定器種や上級品を焼いており、打越窯とともに官窯であったと推測されている〔小柴2010〕。また、赤坂窯跡、打越窯跡、桜峠５号窯では鴟尾を、赤坂窯跡では陶棺も焼成している〔山本2010〕。

第４図　西脇丸山2号墳

第５図　破盤神社西古墳

第６図　西脇古墳群

第７図　西脇廃寺塔心礎

中世の遺跡には中後瀬遺跡〔兵庫県教委1988〕があり、平安時代末から鎌倉時代にかけての集落を検出している。中世寺院には願成寺がある。

3．地名

現在、「大市」という地名は存在していない。関連する地名を求めてみると、大字名の「太市中」が該当する。ただし姫路市に合併する前は「中村」であった。

駅家に関連する地名として「馬屋田」、「前田」、「馬山」が指摘できる。小字名「馬屋田」は太市中の北西端に近い場所に位置し、東西約350m、南北約100mの約３町半を占める。東側は大津茂川を挟み「西垣内」、北側は「高田」と「宇利ウ」、西側は「宇利ウ」と「向山」、南側は「向山」と「旗ノ山」に囲まれている。

小字名「前田」は「大市」地域の中に３箇所存在している。太市中に１箇所、北側の西脇に１箇所、北東の相野に１か所が存在している。太市中村の「前田」は、「馬屋田」の南東約150mに位置し、北側は「中垣内」、東側は「九反ノ尻」、西側は「下ノ倉」、南側は「小黒」に囲まれている。東西約250m、南北約110mの約２町半を占める。西脇の「前田」は、「馬屋田」の北側約100mに位置し、北側は「構ノ内」「浦垣内」、東側は「草田」、西側は「村前」、南側は「高田」に囲まれている。東西約200m、南北約250mの約４町を占める。相野の「前田」は、「馬屋田」の北東側約500mに位置し、北側は「中垣内」、東側は「三反長」「高田」「山崎」、西側は「郷ノ坪」「硯橋」、南側は「向山」に囲まれている。東西約200m、南北約350mの約６町を占める。

向山遺跡が存在する地点から南側に伸びる山塊は「馬山」で、頂上の標高174.1mを測る。「馬山」は嘉暦４年（1329）の『法隆寺領播磨国鵤荘絵図』にも記載されている。

第３節　従来の大市駅家および大市駅家周辺の駅路の研究

鎌谷木三次は『播磨上代寺院址の研究』〔鎌谷1942〕の中で、大市駅家の所在地を根拠を示していないが「揖保郡太市村大字西脇付近」と推定している。山陽道駅路は東側の草上駅家を安室村辻井付近に推定しており、「余部村大字飾西を経て太市村大字西脇に通ずる」、「西して槻坂を超え」と、現在の主要地方道姫路上郡線に推定している。

1970年に刊行された『姫路市史』第２巻の「駅制」では、大市駅家の所在地は不明であるとしているが、「太市中、西脇、相野あたりが適応していると思う」と推測している。大市周辺の山陽道駅路の推定は、東隣の銕磨郡草上駅家の所在地を蛤山東北麓に推定しているため、「蛤山の北のふもとを過ぎ、夢前川、音生川を渡って、飾西から大市駅に向かう」としており、鎌谷木三次と同様に、現在の主要地方道姫路上郡線を推定している。なお、今回の調査で大市駅家とした地点は『姫路市史』第２巻の「産業」の中の「太市飾西地区の窯跡分布図（今里幾次氏原図による）」では瓦窯跡としている〔姫路市史編集委員会1970〕。

これと前後する時期に、高橋美久仁は太市の中に小字名「馬屋田」を見出した。また、今里は播磨地域の瓦出土地の中で播磨国府系瓦の出土地を整理し、駅家との関係を指摘した〔今里1974〕。この中で向山遺跡＝大市駅家と推定したのである。草上駅家を今宿丁田遺跡に推定したため、西へ直進して桜峠を越えて揖保郡に入る経路である。今里は大市駅周辺の駅路を太市中の集落内にある現道を直線的に斜行し、太市中と西脇の大字界を通ると推定し、図示した〔今里1978〕。高橋が見出した小字界及び小字名は大市地域の中心地点しか図化〔武藤1978〕されなかった。この図に瓦の分布する向山遺跡から駅家の推定地を記入したもの〔高橋1990〕が作られ、後に今里が推定した駅路の詳細が図示された〔高橋1992・1995〕。2010年、今里は大市駅家の推定地は図化したが駅路

については記入していない〔今里2010c〕。しかし、本文の記述では従来の説を採っている。今里や高橋の山陽道駅路の推定位置を採り、瓦の分布する地点を駅家とすると駅路と駅家は約200m離れる事となる。

これとは別に、足利は摂津・播磨地域の山陽道の駅路全体を復原する中で、桜峠から槻坂間の駅路を想定した〔足利1992〕。付図として、明治期の大日本帝国陸地測量部作成の地図の２万分１の地図に山陽道駅路の復原を手書きで加筆している。やや地点は南側にずれてはいるが、高橋の小字馬屋田と向山遺跡＝大市駅家を援用して、大市駅家の位置を追認している。山陽道駅路については山裾を目指し最短距離を指向するルートを推定しているが、詳細な地点考証はなされていない。この説を採ると駅路と大市駅家は接することとなる。

以上のように山陽道駅路の推定は「大市」の範囲内を通り、布勢駅家側は槻坂を越える事は共通しているが、草上駅家側の経路は二案存在する。これは現在も確定していない草上駅家の位置を辻井付近や蛤山東北麓に推定することにより、現在の主要地方道姫路上郡線を推定する案と、草上駅家を今宿丁田遺跡に推定することにより、桜峠を越える二案である。さらに桜峠を越える案は中村の集落内で屈折する案と尾根先端を通り最短距離を通るルートの二案がある。

近年の研究成果から山陽道駅路と駅家との関係は接していることが判明しており、「現在想定されている山陽道から離れすぎているため、山陽道のルート設定自体を見直す必要がある様に思われる」〔山下2010〕との指摘がされている。

第４節　行政資料に見る向山遺跡と大市駅家

大市駅家関連遺跡が行政資料の遺跡地図類に初めて記載されたのは、昭和40年３月、兵庫県教育委員会発行の『兵庫県遺跡地名表』〔兵庫県教委1965〕である。遺跡名称「邑智の駅家遺跡」、種別「その他」、所在地「太市中向山」、地目「山林宅地」、摘要（遺存状況・出土品）「奈良時代の布目瓦」、調査名「是川」として記載されている。北側の「西脇・村前」に位置する奈良時代の瓦出土地は塔心礎があることから「寺院跡」「西脇廃寺」として区別している。昭和43年３月、文化財保護委員会発行の『全国遺跡地図（兵庫県）』〔文化財保護委1968〕も「邑智の駅家遺跡」として踏襲され、７万５千分の１の地図に赤ドットで示されている。

昭和43年12月、兵庫県教育委員会発行の『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表』第２集〔兵庫県教委1968〕では、今まで登録されていた「邑智の駅家遺跡」の名前が消え、近い位置で「向山布目瓦散布地」が４万分の１の地図に赤ドットで示され登載されている。地目が「山篭竹藪一帯」、現状は「竹やぶの為相当あれているものとみられる」と記載されているが、同一地点なのか別地点なのかは判断できない。

昭和45年２月、兵庫県教育委員会発行の『兵庫県都市計画地域内埋蔵文化財分布地図及び地名表』〔兵庫県教委1970〕では、５万分の１の地図に赤で「向山布目瓦散布地」の遺跡範囲を囲って登載されている。昭和47年３月発行の『特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』第１分冊〔兵庫県教委1972〕でも「向山布目瓦散布地」として昭和43年発行の『分布地図および地名表』〔兵庫県教委1968〕の遺跡番号を踏襲し、赤ドットで示している。ただし地図は２万分の１と詳細になった。

昭和57年３月、文化庁文化財保護部発行の『全国遺跡地図　兵庫県』〔文化庁1982〕には「向山遺跡」と「邑智の駅家遺跡」と二地点が７万の１の地図に赤ドットで記載されたが、おそらくこれまでの遺跡地図の混乱が原因であろう。

太子町教育委員会『太子町埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』〔太子町教育委1994〕では域外であるが、大市地域内の古代山陽道の経路を破線で明記しているが、まったく研究成果を取り入れていない。

第4図　大市駅家付近

第7図　大市駅家付近（註18文献から加筆　○印　向山遺跡）

第11図　大市中遺跡（大市駅跡）付近
（武藤氏「古代日本の交通路・播磨国」から加筆）

図3-19　大市駅付近地籍図（武藤氏「播磨国」『古代日本の交通路Ⅲ』に加筆）

表1　古山陽道地帯播磨国府系瓦出土遺跡一覧表

番号	地名（遺跡名）	国分寺式		長坂寺式		古大内式		本町式		野条式		北宿式		備考
		丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	
1	明石市太寺二丁目					○					○			（寺跡）
2	〃　魚住町長坂寺			○	○	○	○	○				○	○	
3a	加古川市野口町古大内	○	○			○	○	○	○	○	○			
3b	〃　〃　野口			○		○	○			○		○	○	
4	姫路市阿保町北宿					○	○					○	○	
5	〃　御国野町国分寺	○	○	○	○	○	○			○	○			国分僧寺
6	〃　〃〃字新堂門	○	○		○									国分尼寺
7	〃　市之郷	○			○	○								国府寺
8	〃　本町	○				○		○	○					国庁跡
9	〃　辻井					○		○						（寺跡）
10	〃　大市中・向山					○								
11	竜野市揖西町小犬丸					○	○							
12	赤穂郡上郡町神明寺			○									○	
13	〃　〃　落地					○		○	○					

今里 1974

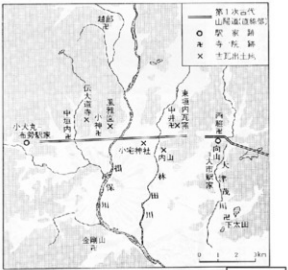
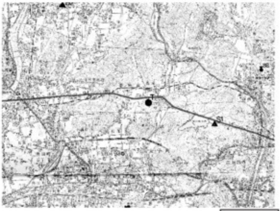
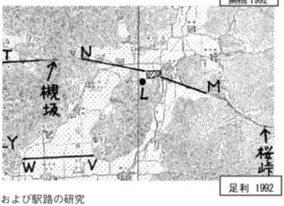


図88　旧揖保郡内の駅家・寺院等分布図





第8図　大市駅家および駅路の研究

平成12年３月、兵庫県教育委員会発行の『兵庫県遺跡地図』〔兵庫県教委2000〕では、ドットで示されていた上記二地点を含む広い範囲を囲み「向山遺跡（大市駅家跡）」として３万５千分の１の地図に面的に登録されて、現在に至っている。

以上、行政資料に見る現在の「向山遺跡（大市駅家跡）」の名称は「邑智の駅家遺跡」→「向山布目瓦散布地」→「向山遺跡（大市駅家跡）」と大きく変遷していった事が判った。今里の播磨国府系瓦や高橋の「馬屋田」発見以前による大市駅家の位置推定以前に、根拠は示されていないが「奈良時代の布目瓦」出土地を「邑智の駅家遺跡」として『兵庫県遺跡地名表』〔兵庫県教委1965〕で報告した地元在住の是川は大市駅家研究の先駆者であると言えよう。

第５節　向山遺跡の既往の調査

向山遺跡の発掘調査は、平成12年（2000）度に姫路市教育委員会が太市地区の下水道工事に先立って確認調査を実施したのが初めてである。向山遺跡ばかりでなく西脇廃寺も初めての発掘調査となった。全体で43箇所の試掘坪の調査が行われたが、ほとんどの坪が工事による掘削の影響が及んでいないため、盛土内までしか掘削していない。そのような状況の中、今回調査研究事業で発掘調査を実施した４区と５区の間にあたる坪№33・№34からは古代の平・丸瓦が出土した〔小柴2002〕。

翌、平成13年（2001）度には姫路市教育委員会が市道補修工事に伴い、調査を実施した。この地点は今回調査研究事業で発掘調査を実施した１区と２区の間にあたる。南北方向に伸びる市道の両側に幅50cmのトレンチを設定し、発掘調査が行われている。西側は延長102m、東側は延長126mの発掘調査を実施しているが、南側10mを除いて工事で影響が及ばないため、盛土内までしか掘削していない。このため、遺構の有無は不明である。ただし、遺構を確認できる面まで発掘調査を行った南端では東西方向の幅1.5m、深さ25cmの溝を検出しており、奈良時代の土師器が出土している〔小柴2003〕。

このように発掘調査により、古代の瓦や土器が出土し、古代遺跡の存在が明らかになった。

第６節　分布調査及び地籍図調査の成果

先に述べたように、現在までの山陽道駅路や大市駅家の研究、文献研究、地理・地名研究、向山遺跡の過去の発掘調査などを基礎資料として、分布調査および地籍図調査を実施した。

１．分布調査

調査の結果、「大市」地域の表層地割り状況と向山遺跡周辺の遺物の散布について成果を得た。

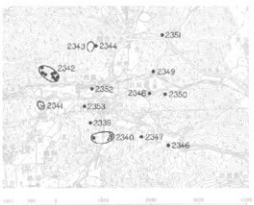
「大市」地域の表層地割りの状況は、非常に複雑であるが、現地踏査や聞き取り調査、地図の読み取りの結果、大きく①から④の４種類の企画に分類できた。

①は桜峠の西側の桜山貯水池下の南側から北に向かって張り出した尾根の北端から簗ノ山北端を目指す斜行するラインで、上ノ山の南端を通り、N-70°-Wを測る。この地割りの残る地域は桜山貯水池下から太市中に至る450mと太市中の集落中の100mのみである。

②は①の西端である簗ノ山北端から槻坂に向かって向山北端を通り槻坂の東方を目指す斜行するラインに平行または直交する地割りで、N-77°-Wを測る。この地割りの残る地域は太市中の大津茂川西側地域の一部、西脇

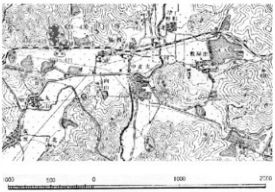
1	西原廃寺	寺院跡	西脇、村ノ前	民　有	水田		奈良時代、鴟尾瓦、塔心礎	是川
1	邑智の駅家遺跡	その他	大市中向山	民　有	山林宅地		奈良時代 布目瓦	是川

兵庫県教委 1965



2353 邑智の駅家遺跡

文化財保護委 1968

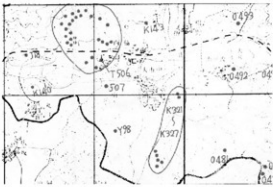


507 邑智の駅家遺跡

兵庫県教委 1968

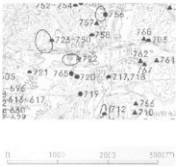
768 向山布目瓦散布地

兵庫県教委 1970



507 向山布目瓦散布地

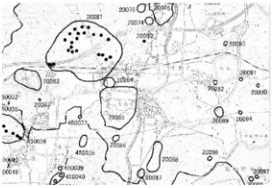
兵庫県教委 1972



文化庁 1982

765 邑智の駅家遺跡

720 向山遺跡



兵庫県教委 2000

20085 向山遺跡(大市駅家跡)

第９図　行政資料に見る向山遺跡と大市駅家

地域の一部で、この基準ラインに近い部分は比較的多く残る。

③は揖保郡条里と同一の地割りで、N4°Wを測る。この地割りの残る地域は太子町広坂地域の広範囲をはじめとして、太市中地域の一部、西脇地域の一部に存在する。太子町広坂地域については、広坂地域より下流部あるいは揖保郡の広域に広がる揖保郡条里と一群のものである。太市中地域から西脇地域の一部にかけての地域は西脇廃寺と推定大市駅家を結ぶラインがきれいに残っているほか、南北方向に良好に残る。

④は正方位の地割りである。この地割りの残る地域は相野地域の広い範囲と西脇地域の一部に存在する。相野地域は条里の痕跡としても認識できる。

以上、表層地割りの状況を見てきたが、広坂地域の広範囲で③揖保郡条里、相野地域で④正方位条里がまとまって存在する他は、大市中地域は①②③④の各地割りが、西脇地域は②と③を中心に交錯している。相野地域は④を中心に③が存在している。

2．瓦の分布

大市駅家と推定されている向山遺跡の中でも、向山池周辺では古くから瓦が採集されており、今回の分布調査でも、向山池北側の駅家推定地（今回発掘調査の第3区と第5区）で多量の古代瓦（平瓦・丸瓦）が採集できた。

また、聞き取り調査に置いても、昭和52年（1977）に向山池の北側の道路建設工事の際に大量に瓦が出土した事。あるいは昭和50年頃、向山池北側で住宅を新築した際、大量に瓦が出土したが、埋め戻して、家を建てた、などの情報を得た。

この瓦の分布からも、従来から推定されていた大市駅家の位置は肯定されるべき内容である。

3．地籍図調査

当該地域の地籍図を検討した。地籍図には分筆の状況が記載されており、拡張した道路や新設した道路の状況が詳細に判る。「上垣内」を北西－南東方向に斜行する道路は地籍図によると分筆された新道であることが判明した。分筆時期は聞き取りにより昭和８年（1933）であることが判った。

この「上垣内」を北西－南東方向に斜行する道路は、武藤誠により古代山陽道駅路に推定されていた痕跡であった。このことから、この斜行する道路は駅路の痕跡とする積極的な根拠はなくなった。これにより、今里・高橋の案は根拠を失った。

さらに、高橋が小字「馬屋田」の位置を図面に記していたが、「馬屋田」の範囲が拡がり、西側の向山麓まで伸びる事も判明した。これにより、大市駅家の推定地のほとんどが「馬屋田」の範囲内に収まる事が判明した。

4．古代山陽道駅路の推定

以上のように、表層地割りに駅路の明瞭な痕跡が残っていない事から、古代山陽道駅路の実態が明らかではなかった。しかし、分布調査および地籍図の分析の結果、小字界や字界の存在により、第３節で紹介した尾根据の最短距離を指向した足利案の駅路推定の可能性が高まった。

以上の事前調査を踏まえ、古代山陽道餝磨郡草上駅家と揖保郡布勢駅家の大市地区内の駅路の推定および大市駅家の推定を行った。これを元に発掘調査の調査区の位置を決定した。

第７節　地域での取り組み

平成10年（1998）２月に太市地区連合自治会は、向山公民館横に「邑智駅家跡」の石碑と「邑智（大市）駅家」の説明石碑を設置し、「邑智（大市）駅家」の存在をアピールしている。さらに周辺で採集された瓦をはじめとする遺物を向山集会所で展示している。

また、平成23年、太市郷土誌編集委員会では、地域の歴史をまとめた郷土誌『おおいち』を刊行し、邑智（大市）駅家の重要性を説いている。

このように、太市地区では邑智（大市）駅家を地域全体で保存に取り組んでいると言える。

第10図　邑智駅家跡石碑

【引用・参考文献】

足利健亮1992「山陽道の歴史地理学的考察」『山陽道（西国街道）』歴史の道調査報告書第２集　兵庫県教育委員会

今里幾次1974「山陽道播磨国の瓦葺駅家」『兵庫県の歴史』第12号

今里幾次1978「古代の駅制と布勢駅家」『龍野市史』第１巻　龍野市

今里幾次2010a「西脇廃寺」『姫路市史』第７巻下　姫路市史

今里幾次2010b「峰相山鶏足寺跡」『姫路市史』第７巻下　姫路市史

今里幾次2010c「大市駅家跡」『姫路市史』第７巻下　姫路市史

今里幾次2013「播磨国の山陽道駅家」『姫路市史』第１巻下　姫路市史

鎌谷木三次1942「西脇廃寺」『播磨上代寺院址の研究』成武堂

鎌谷木三次1942「播磨上代の山陽街道と上代寺院址」『播磨上代寺院址の研究』成武堂

加藤史郎2010a「桜峠５号窯」『姫路市史』第７巻下　姫路市史

加藤史郎2010b「大池２号窯」『姫路市史』第７巻下　姫路市史

岸本道昭2006『山陽道駅家跡』日本の遺跡11　同成社

岸本道昭2014「邑智駅家（太市中遺跡・向山遺跡）」『播磨国の駅家を探る』第15回播磨考古学研究集会資料集

小柴治子2002「大市周辺確認調査（第１次）」『TSUBOHORI　平成12年度（2000）』姫路市埋蔵文化財略報　姫路市教育委員会

小柴治子2003「向山遺跡（第２次）」『TSUBOHORI　平成13年度（2001）』姫路市埋蔵文化財略報　姫路市教育委員会

小柴治子2010「御坊ヶ山１号窯」『姫路市史』第７巻下　姫路市史

篠宮正2014「古代官道『大市駅家と山陽道』」『兵庫県立考古博物館NEWS』Vol.14　兵庫県立考古博物館

島田清1933「播磨国寺院跡並古瓦発見地名表」『播磨』２－３

太子町教育委員会1994『太子町埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』太子町文化財資料第43集

太市郷土誌編集委員会1991『郷土誌おおいち』

高橋美久仁1990「古代播磨国の駅家」『播磨考古学論叢』今里幾次先生古希記念論文集刊行会

高橋美久仁1992「古代山陽道の駅家」『山陽道（西国街道）』歴史の道調査報告書第２集　兵庫県教育委員会

高橋美久仁1994「古代の美作道」『歴史の道調査報告第４集　美作道』兵庫県教育委員会

高橋美久仁1995『古代交通の考古地理』大明堂
永井信弘・森内秀造1993『播磨とその周辺の須恵器』『古代の土器研究会第二回シンポジウム発表資料』古代の土器研究会
永井信弘1997『峰相山窯跡群について（1）』『ひょうご考古』第３号　ひょうご考古学研究会
中濱久喜2013『浄安寺古墳』『姫路市史』第１巻下　姫路市史
姫路市史編集委員会1970『駅制』『姫路市史』第２巻
姫路市史編集委員会1970『西脇廃寺』『姫路市史』第２巻
兵庫県教育委員会1965『兵庫県遺跡地名表』
兵庫県教育委員会1968『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表』第２集
兵庫県教育委員会1970『兵庫県都市計画地域内埋蔵文化財分布地図及び地名表』
兵庫県教育委員会1972『特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』第１分冊
兵庫県教育委員会1988『中後瀬遺跡』兵庫県文化財調査報告第59冊
兵庫県教育委員会1995『西脇古墳群』兵庫県文化財調査報告第141冊
兵庫県教育委員会2000『兵庫県遺跡地図』
兵庫県教育委員会2001a『亀田遺跡（第２分冊）』兵庫県文化財調査報告第209冊
兵庫県教育委員会2001b『亀田遺跡（第１分冊）』兵庫県文化財調査報告第210冊
兵庫県教育委員会2003『太市中古墳群』兵庫県文化財調査報告第258冊
兵庫県教育委員会2011『西脇丸山２号墳』兵庫県文化財調査報告第397冊
兵庫県教育委員会2013『芝添遺跡』兵庫県文化財調査報告第447冊
兵庫県立考古博物館2014『古代官道山陽道と駅家』
兵庫県立考古博物館2014『古代山陽道と野磨駅家』
文化財保護委員会1968『全国遺跡地図〔兵庫県〕』
文化庁文化財保護部1982『全国遺跡地図　兵庫県』
増田重信1988『「太市の里」をたずねて』『文化財見学シリーズ』姫路市教育委員会
松本正信ほか1988「考古学からみた太子町」『太子町史』第三巻　資料編Ⅰ　太子町
松本正信2010『石倉窯跡群』『姫路市史』第７巻下　姫路市史
武藤誠1978『播磨国』『古代日本の交通路Ⅲ』大明堂
森内秀造1995『西脇古墳群の須恵器と峰相山窯跡群』『西脇古墳群』兵庫県文化財調査報告第141冊
山下史郎2010『古代官道研究の現状と課題』『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第384冊
山本和子2010『赤坂窯跡』『姫路市史』第７巻下　姫路市史
山本和子2013『太市中遺跡』『姫路市史』第１巻下　姫路市史

第３章　第Ⅲ期の調査経過

第１節　平成25年度の調査

第Ⅰ期・第Ⅱ期の加古駅家・仮称邑美駅家の発掘調査の成果を上げたことにより、平成24年度の調査委員会で第Ⅲ期の調査地として邑智駅家・大市駅家の調査をすることが決められた。

調査は、詳細な分布調査により古代山陽道を推定した２地区にトレンチを設定して実施した。調査トレンチは、東側を１区、西側を２区と呼称し、それぞれ１本ずつ設定した。調査トレンチの方向は、想定される山陽道に直交して設定した。調査区間の距離は約120mである。

調査は、水田耕土を重機で除去し、以下を人力で掘削した。なお、調査後、水田として復旧するため、水田耕土と下層の掘削土は分けて仮置きした。

検出した遺構は、写真・平面図・断面図等で記録した。調査内容については、古代官道調査委員会の各委員から２月10日・15日・18日に調査指導を受けた。また調査研究事業は報道機関に公表し、２月15日の地元説明会で一般に公開した。説明会には30名の参加者があった。

調査にあたっては、土地所有者の是川武士氏、崎谷眞也氏、太市中自治会、向山自治会、姫路市教育委員会、是川長氏から多大な協力を受けた。

第２節　平成26年度の調査

調査は、平成25年度の発掘調査及び分布調査の成果を踏まえ、平成26年６月15日に第１回古代官道調査委員会を開催し、平成26年度の詳細な調査場所選定や調査区の設定方法を決定した。

確認調査の調査区は駅館院の内部から東辺築地を推定した東西方向の３区、駅館院の内部から北辺築地と山陽道駅路を推定した南北方向の４区の合計２地区に調査区を設定して調査を実施した。３区は、２筆にまたがるため、西側を３-１区、東側を３-２区と呼称した。４区は、２筆にまたがるため、南側を４-１区、北側を４-２区と呼称した。

掘削は、水田耕土を重機で除去し、以下を人力で掘削した。なお、調査後、水田として復旧するため、水田耕土と下層の掘削土は分けて仮置きし、埋め戻しも分けて、転圧しながら行った。

検出した遺構は、写真・平面図・断面図等により記録した。埋め戻しにあたっては遺構の保護と明示をするため、砂を入れて養生した。

調査内容については、平成26年12月18日に第２回古代官道調査委員会を開催し、駅館院の可否と今後の調査方針を決定した。また、第２会の古代官道調査委員会に出席できなかった木本委員からは12月20日に調査指導を受けた。

調査研究事業は報道機関に公表し、12月20日の現地説明会で一般に公開した。説明会には53名の参加者があった。

調査にあたっては、土地所有者の嶋坂登氏、岡本敏明氏、大塚重之氏、鴻坂仁氏、向山自治会、太市中自治会、姫路市教育委員会、是川長氏から多大な協力を受けた。

第３節　平成27年度の調査

平成27年度は前年度の委員会で承認された駅館院想定箇所を調査することとなった。当初の予定ではため池北側に隣接した部分と３区西側隣接地の２カ所を調査する予定であったが、調査の準備段階で、ため池隣接地の地権者に混乱が認められることが明らかになった。そこで３区隣接地の調査を先行させ、調査と併行して地権者の特定を試みたが、結局地権者の特定に至らず、ため池隣接地の調査は断念した。

調査は10月10日に現地立会を実施し、同15日より掘削を開始した。調査面積は106㎡である。掘削は、表土を重機で除去し、以下を人力で掘削した。

検出した遺構は、写真・平面図・断面図等で記録した。埋め戻しにあたっては遺構の保護と明示をするため、砂を入れて養生した。

10月30日には古代官道調査委員会を現地で開催し、検出した遺構などについて、委員会から指導・助言を受けた。同日、姫路市立太市小学校６年生の現場見学を受け入れた。11月１日には現地説明会を行い、100名の参加者があった。調査にあたっては、土地所有者の嶋坂登氏、向山自治会、太市中自治会、姫路市教育委員会、足川長氏から多大な協力を受けた。

第４節　平成28年度の調査

平成28年度は調査報告書の作成を主たる事業として実施した。４月から遺物、接合・復元、実測を進めるとともに、併行して図版の作成・トレースを実施した。

10月21日に第１回古代官道調査委員会を開催し、整理作業の途中経過を報告するとともに、報告書掲載予定資料を委員およびオブザーバーに実見していただき、ご教示・ご助言を得た。

平成29年３月10日に第２回古代官道調査委員会を開催し、次年度以降の計画について、審議し、方針を決定した。

第４章　向山遺跡の調査成果

第１節　調査の概要

１．概要

向山遺跡は姫路市太市中字馬屋田・字向山・字高田・字宇利ウの広域にわたり埋蔵文化財包蔵地として登録されている。今回の発掘調査地は姫路市太市中字馬屋田に５か所の調査区を設定し、平成25年度から平成27年度の３箇年にかけて発掘調査を行った。

同地は大津茂川の西岸に位置する。１区・２区・４区は馬山の北麓の谷地形の扇状地であり、さらに北側の山塊からの堆積作用により形成された谷地形に立地する。標高は17ｍ～19ｍ前後を測り、東の大津茂川に向かって傾斜している。

３区・５区は馬山から北西に派生した向山の尾根の先端の東麓にあたる。標高は20ｍ前後を測る。

２．調査区の設定

分布調査および予備調査によって古代山陽道駅路の推定を行った。この成果に基づき、平成25年度は推定大市駅家付近の駅路の痕跡を確定するため、１区と２区の２箇所の調査区を設定して調査を実施した。２区では古代山陽道駅路の痕跡を確認した。

平成26年度は、平成25年度に２区で確認した古代山陽道駅路のさらなる確認を４区で行い、大市駅館院の位置を確定するための調査を３区と４区で行った。４区で古代山陽道駅路の続きを確認し、駅館院の北辺溝を確認した。また３区では駅館院の東辺溝を確認した。

平成27年度は、平成26年度に駅館院の東辺溝と北辺溝を確認したため、駅館院の内部と推定される部分に調査区を設定した。

第２節　発掘調査の成果

１．平成 25 年度

調査地の基本土層は、約20cmの水田土壌層の下が、遺構検出面である。遺構検出面の標高は１区がT.P.17m前後、２区がT.P.18.5m前後である。

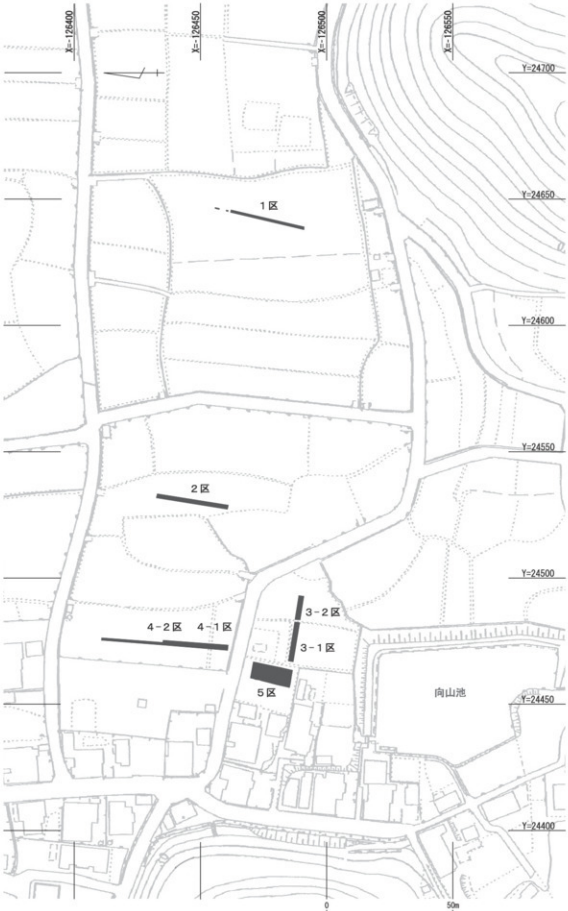
１区（第12図）

東西方向に幅1.0m、延長29.7mのトレンチを設定した。その後、30.6mまで拡張し、さらに幅30cmで1.0m拡張し、2.8mあけて1.6m拡張した。最終的には31.4㎡を掘削した。

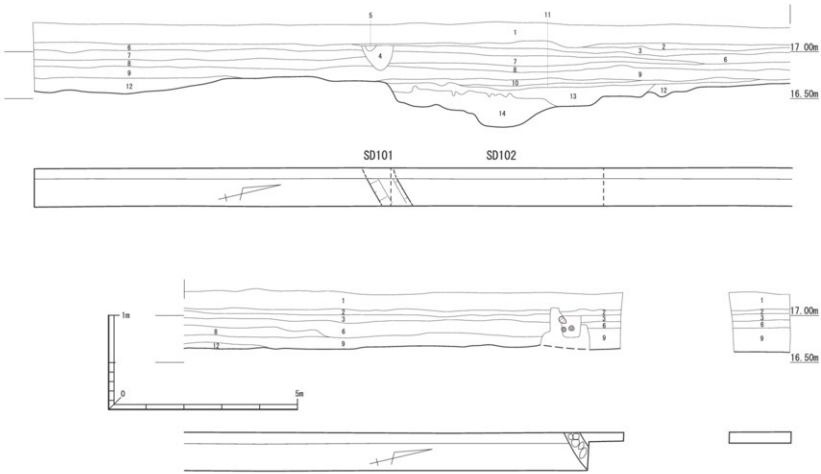
１区は上層に耕土直下から掘りこんでいる溝や石組みの暗渠を検出した。それ以下は水平堆積で、下層に部分的な落ち込みが存在するが、人工的なものではない。明瞭な遺構が存在しなかったため、北側に拡張して坪を掘削したが、同様の堆積が続いていた。遺物は古代の瓦や須恵器が少量出土している。

溝SD101

溝SD101は調査区の南側から９ｍに位置し、耕作土直下で検出した。幅は0.3m、深さは検出面から0.3mを測る。断面形はＵ字形である。方向はN-73°-Eを指す。



第11図　向山遺跡の調査区配置図



1. 耕土
2. 床土
3. 10YR5/2　灰黄褐　極細砂　Mn 含む
4. 10YR6/1　褐灰　極細砂　わずかに Mn 含む
5. 10YR5/2　灰黄褐　極細砂　Mn 含む
6. 10YR6/2　灰黄褐　極細砂
7. 10YR6/2　灰黄褐　シルト質極細砂　わずかに Mn 含む
8. 10YR6/3　にぶい黄橙　シルト質極細砂　Mn Fe_2O_3 含む
9. 10YR5/2　灰黄褐　極細砂混じりシルト
10. 10YR5/3　にぶい黄褐　極細砂～シルト
11. 10YR5/1　褐灰　シルト質極細砂　炭含む
12. 5Y6/1　灰　極細砂
13. 2.5Y6/3　灰黄　粗砂～細砂
14. 2.5Y6/3　にぶい黄　細砂～極細砂

第12図　1区平面・土層断面

溝SD102

溝SD102は調査区の南側から9.5m～13.5mに位置し、最下層で検出した。幅は4.0m、最深0.4mを測る。断面形はU字形である。方向はN-77°-W前後を指す。遺物は瓦と須恵器が出土した。

2区（第13・14図）

東西方向に幅1.8m、延長28.4mのトレンチを設定した。調査面積は51.1㎡である。検出した遺構には、溝、落ち込み、下層の遺構がある。

溝SD201

溝SD201は調査区の南側に直交して存在する。幅は3.5m、深さは検出面から0.5mを測る。埋土は鉄分を多量に含んでおり、砂質が強い。断面形は浅いU字形である。方向はN-77°-Wを指す。遺物は古代の瓦と須恵器、土師器が出土し、平瓦を図化した。

落ち込みSX201

落ち込みSX201は調査区の北側に存在する。幅6.5m以上、深さ0.4mで、調査区外まで延びている。溝の北側と落ち込みの南側の距離は14.5mを測る。遺物は古代の瓦と須恵器が出土した。

道路痕跡SF201

溝SD201と落ち込みSX201の間の面で、幅14.5mを測る。後世の耕作により削平されているため詳細は不明であるが、古代山陽道の痕跡であると考えられる。

溝SD202

溝SD201の下層に存在している溝である。調査範囲が狭いため、溝か土坑か判断がつかない。幅2.0m、上部は上層の溝SD201で削られているため最深0.1mで、断面形は浅いU字形である。方向はN-77°-Wを指す。遺物は7世紀第2四半期の須恵器蓋坏が出土した。北側の落ち込みの下層には流路が存在している。北側の調査区外に延びており、規模は不明である。

流路SR201

落ち込みSX201の下層に位置し、幅6.3m以上、深さ0.4mで、調査区外まで延びている。

2．平成26年度

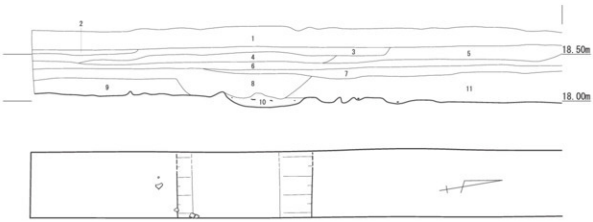
調査地の基本土層は、3区では約20cm、4区では約50cmの水田土壌層の下が、遺構検出面である。遺構検出面の標高は3区がT.P.19.9m前後、4区がT.P.19.0m前後と約90cmの段差がある。

3区（第15・16図）

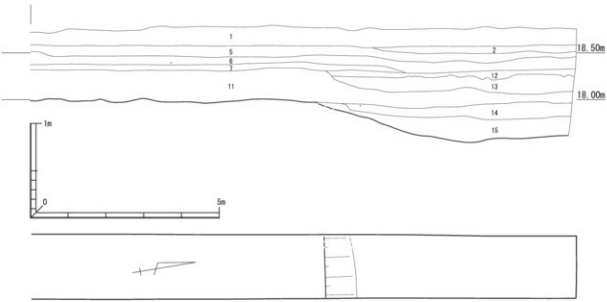
3区は東西方向に延長26.5m、幅2.0mの調査区を設定した。畦を挟んで標高の高い西側を3-1区、東側を3-2区と呼称した。3-1区は延長16m、3-2区は延長10.5mである。3-1区と3-2区の間は土層の堆積状況を見る為、北壁部分のみを掘削した。

3-1区は削平が著しく東側に行くにしたがって、基盤層が高くなっている。西端で瓦溜まりSK301・SK302を検出し、大量の瓦片（長坂寺式軒丸瓦4点、軒平瓦2点を含む）が出土した。廃棄のための土坑であると考えられるが、一部溝状を呈する部分SD306が存在した。瓦溜まりから東側は南北方向の溝と柱穴20基を検出した。

溝は5条検出し、直線的な溝3条（SD301～SD303）は揖保郡条里と同一方向である。柱穴は方形掘形を持つ



SD201

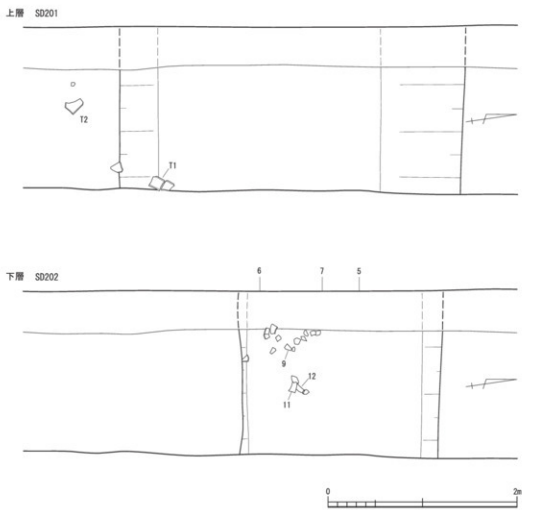


SR201

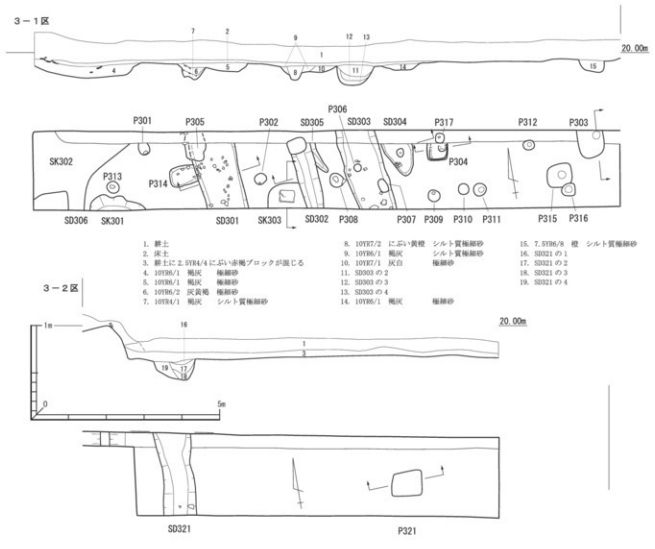
1. 耕土
2. 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～シルト質極細砂 Mn 含む
3. 10YR6/6 明黄褐 粗砂～極細砂 $MnFe_2O_3$含む
4. 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～粗砂 $MnFe_2O_3$含む
5. 10YR5/4 黄褐 細砂～中砂 $MnFe_2O_3$含む
6. 10YR6/2 灰黄褐 粗砂～中砂混じりシルト質極細砂 Fe_2O_3含む
7. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
8. 10YR5/1 褐灰 粗砂～シルト質極細砂 Fe_2O_3含む
9. 10YR6/1 褐灰 粗砂混じりシルト
10. 10YR7/4 にぶい黄橙 炭含む 下層遺構
11. 7.5Y4/1 灰 中砂混じりシルト質極細砂
12. 10YR5/4 にぶい黄褐 中砂～中礫 鉄分を含んだ礫目立つ 土器混じる
13. 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト質極細砂 [SX201]
14. 10YR6/4 にぶい黄褐 極細砂～細礫 Fe_2O_3含む [SR201]
15. 10YR4/2 灰黄褐 粗砂混じりシルト質極細砂 [SR201]

第13図 2区 平面・土層断面

1. 10YR6/2　灰黄褐　　シルト質極細砂　粗砂～中砂混じり
2. 10YR5/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂
3. 10YR5/1　褐灰　　粗砂～シルト質極細砂　Fe_2O_3混じり　[SD201]
4. 10YR6/1　褐灰　　粗砂混じりシルト
5. 7.5Y4/1　灰　　中砂混じりシルト質極細砂
6. 10YR7/4　にぶい黄橙　炭混じり　[SD202]



第14図　２区　溝SD202　平面・土層断面



第15図　3区　平面・土層断面

もの４基と、円形のもの12基があるが、調査区が狭いため、建物の復原は難しい。検出面からの深さは浅い。

溝SD301

瓦溜まりSK301・SK302の東側に位置する南北方向の溝である。柱穴P305と柱穴P314を切っている。幅1.0m～1.2m、深さは最深10cmを測り、北に向かって傾斜している。方向はN-６°-Wを指す。断面形は浅いU字形を呈する。遺物は瓦と須恵器が出土した。

溝SD302

溝SD301の東側に位置し、並行して走っており、溝SD305を切っている。幅0.4m～0.6m、深さは最深15cmを測り、北に向かって傾斜している。断面形はU字形を呈する。方向はN-４°-Wを指す。遺物は瓦と須恵器が出土した。

溝SD303

溝SD302の東側に位置し、並行して走っており、溝SD305を切っている。幅0.4m～0.6m、深さは最深15cmを測り、北に向かって傾斜している。断面形はU字形を呈し、最下層は炭が堆積している。方向はN-６°-Wを指す。遺物は上層から瓦と須恵器・土師器が出土しており、最下層から出土した土師器杯Aを図化した。

溝SD304

溝SD303の東側に位置し、並行して走っている。南側は削平されており、北側に向かって傾斜している。最大幅0.7m、最大深さ６cmを測る。断面形は浅いU字形を呈する。遺物は瓦と須恵器が出土しており、鉄鉢形須恵器を図化した。

溝SD305

溝SD302の東側に切られて位置している。幅0.2m～0.5m、深さは最深５cmを測り、北に向かって傾斜している。断面形は浅いU字形を呈する。遺物は須恵器が出土した。

溝SD306

土坑SK301の西側に位置する南北溝である。北側は土坑SK302に繋がっており、南側は調査区外に伸びている。幅0.4m、深さは最深４cmを測り、北に向かって傾斜している。方向はN-14°-Eを指す。断面形は浅いU字形を呈する。遺物は瓦と須恵器が出土し、須恵器皿Bを図化した。

土坑SK301

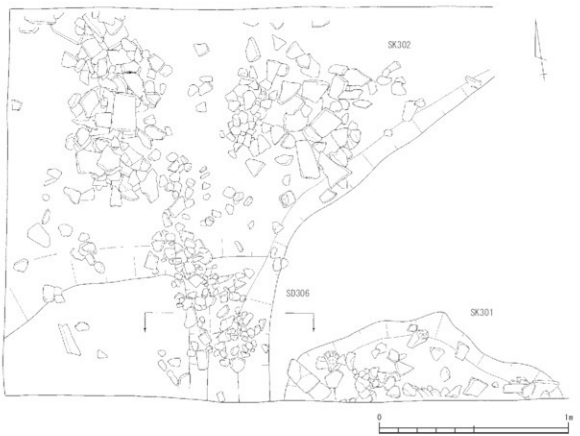
溝SD301とSD306の間に位置し、南側は調査区外に伸びている。調査した範囲では楕円形の一部の形状をなす。南壁幅1.6m、直交する幅0.4m、深さ0.2mを測る。遺物は多量の瓦とわずかな須恵器が出土した。須恵器椀と軒平瓦、軒丸瓦、丸瓦を図化した。

土坑SK302

調査区の西端に位置し、南側は溝SD306と接続しており、北西側は調査区外に広がっている。西壁は北端から1.7m、北壁は西端から2.8mの範囲であるが、調査区外に伸びているため、全体の形状は不明である。深さは最大0.2mで浅く広がっている。遺物は瓦が多量に出土し、須恵器と土師器がわずかに出土している。須恵器坏Bと平瓦、丸瓦を図化した。

土坑SK303

溝SD302の西側に切られて位置している。東側は調査区外に伸びている。東西1.2m、南北0.7m以上で深さ0.2mを測る。東西0.4m、南北0.3m、厚さ0.2mの直方体の石が底面を接して入っていた。遺物は出土していない。



第16図　３区　瓦だまりSK301平面

柱穴

柱穴は方形堀形を持つもの５基（P303・P304・P305・P314・P315）と、円形のもの12基（P301・P302・P306・P307・P308・P309・P310・P311・P312・P313・P316・P317）を検出した。方形堀形のものは一辺0.5m～0.8mの規模を持つ。P305とP314はSD301に切られている。円形のものは直径0.3m～0.4mの規模を持つ。遺物は円形の柱穴P301・P309・P313と方形の柱穴P314で瓦が出土している。

３-２区は３-１区の畦を挟んで東側に位置している。削平が著しく耕土・床土直下で基盤層が現れた。西端で溝SD321を検出したほか、柱穴P3201を検出したのみである。

溝SD321

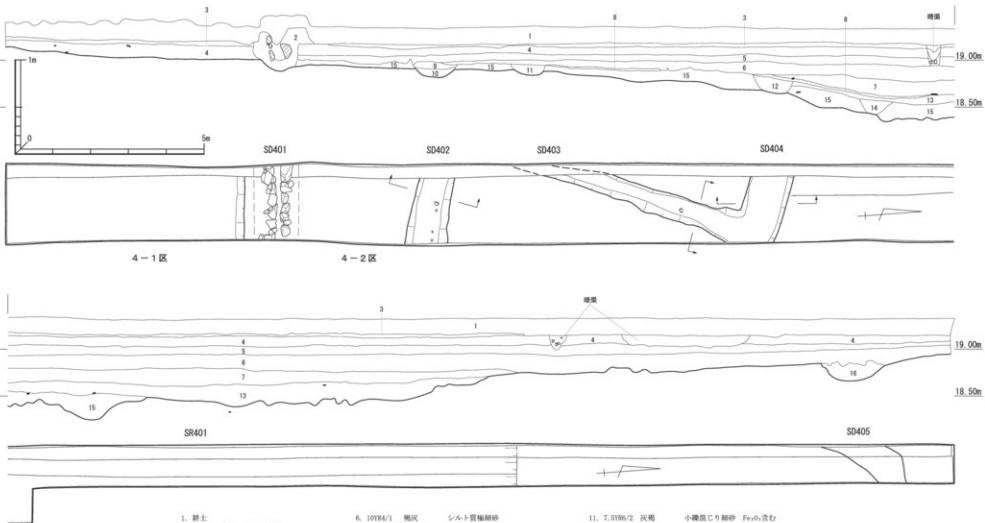
SD321は南北方向溝で、幅0.5m～1.0m、深さ最深22cmを測り、北に向かって傾斜している。断面形はU字形である。方向はN-14°-Eを指す。遺物は土師器が出土した。

柱穴P321

柱穴P321は東端に位置し、東西80cm、南北60cmの長方形堀形をもつ。検出面からの深さは８cmと浅く、底面の標高は19.6mである。柱痕跡は不明である。調査区の範囲が狭く、建物の繋がりは不明であるが、西側には続かない。遺物は出土していない。

４区（第17・18図）

南北方向に延長50.0mの調査区を設定した。南側25.5mは幅2.0m、北側24.5mは幅1.0mである。畦を挟んで標高の高い南側を４-１区、北側を４-２区と呼称した。４-１区と４-２区の間は土層の堆積状況を見るため、西壁部



第17図　4区　平面・土層断面図

分のみを掘削した。

4－1区は削平が著しく、遺構は検出できなかった。遺物は遺構に伴わない形で瓦と須恵器・土師器が出土した。瓦は大量に出土したが、ほとんどが細片になっていた。

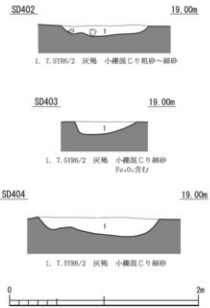
4－1区と4－2区の間で溝（SD401）を検出した。

4－2区は4本の溝（SD402～SD405）と流路（SR401）を検出した。

溝SD401

4－1区と4－2区との間の東西溝であり、現在まで使用されていた水路で水田畦畔を伴っている。調査区に直交しており、最上層は石組の溝であり、人頭大前後の石を使用し、水路面を揃えて組んでいる。幅0.3m、深さ0.3mである。底面は石を使用していない。水路の掘形もしくは初現期の溝は素掘りで、幅1.2m、深さ0.5mである。方向はN-86°-Wを指す。

全掘していないため、出土遺物は少ないが、4－1区と同様に瓦中心で須恵器が少量出土しているが、遺構の時期を示すものではない。



第18図　4区　溝土層断面

溝SD402

調査区の南端から11mのところで東西方向の溝SD402を検出した。幅は1.1m、深さは検出面から0.2mを測る。段面形は浅いU字形である。方向はN-76°-Wを指す。遺物は瓦と須恵器が出土した。

溝SD404

山陽道駅路と同じ方向を向いており、昨年度調査を実施した2区の南側の溝の西側の延長線上に位置する。幅は1.0m、深さは検出面から0.2mを測る。段面形は浅いU字形である。方向はN-76°-Wを指す。遺物は須恵器が出土した。

溝SD403

溝SD404に直行して南側に伸びる溝で、幅は0.6m、深さは検出面から0.2mを測る。段面形は浅いU字形である。方向はN-23°-Eを指す。遺物は須恵器が出土しており、須恵器坏を図化した。

溝SD405

流路SR401の北に位置する溝で、幅は0.6m ～0.8m、深さは検出面から0.2mを測る。埋土は他と異なり、黒色系で、時代はやや遡ると考えられる。遺物は土師器の小片が出土したのみである。

流路SR401

調査区の中央部から北側に存在する。幅18m、最大深度0.6cmである。平成25年度調査の2区の北端で見つかった流路の続きであると考えられる。遺物は古代の須恵器や瓦が出土しているが、3区や4－1区に比べてはるかに少ない。特筆できる遺物として、緑釉陶器が出土している。

3．平成27年度の調査

5区 （第19～21図）

5区は前年度までの調査で駅館院が推定された地点で実施した。

基本層序

調査区の基本層序は、大きく4層に区別した。上から第1層：表土（土壌改良剤含有）、第2層：明黄褐色～赤褐色の極細砂から細砂、第3層:灰黄褐色粘質シルトから極細砂、第4層:明褐色から黄褐色粘質シルトである。

当初、第2層が地山面と考えていたが、サブトレンチでその下層にあたる第3層から奈良時代のものと思われる須恵器片が複数出土したことを確認し、第2層は地山ではないと判断された。均質で地山層と比較しても違いがほとんどないことから、地山層を削平した土を用いた整地層と解釈した。したがって、第4層が地山面と考えられる。第4層は南から北に向かって緩やかに下がっており、傾斜地に平坦面を作るために第2層による整地が行われたものと考えられる。

検出した遺構はいずれも第2層上面から掘りこまれたもので、一部の深い遺構を除いて、2層の中で納まっている。

遺構

検出された遺構としては、土坑、溝、ピット、そして礎石土坑などがある。

礎石土坑（SK501・SK502）

調査区南半に位置し、調査区の東西壁面にかかる形で各1基、合計2基を検出した。両者は東西に並び、礎石間の距離は約6mである。第2層上面から掘りこまれ、底面は第3層を抜いて地山も掘りぬいている。

礎石土坑SK501（第22図・写真図版）

礎石土坑SK501は調査区東壁に接して検出した。調査区外に伸びるため、全容は明らかではないが短径で1.5m超える土坑を掘削し、そこに礎石と考えられる石が入っていた。検出した範囲では根石などの下部構造は認められず、礎石底面の形に準じて土坑が掘削されている。また、土坑埋土には礎石の一部を考えられる石片が多く含まれ、SK501の状況と合わせ、後世に礎石を分割・撤去しようと試みられた結果ではないかと考えられる。

礎石土坑SK502（第22図・写真図版）

礎石土坑SK502は調査区西壁に接した場所で検出した。調査区外に伸びるため、全容は明らかではない。幅1.2m、検出長2mの土坑である。SK501と比べ、汚れた土が入っていた範囲が広がり、最終的に細長い形状となった。また、中心に据えられた石は上部に破砕しようとした痕跡が顕著で、はつられたと考えられる石片もSK501より多く見つかっている。根石など下部構造はないものの、石の下部形状に合わせて堀方は掘削されていた。

土坑

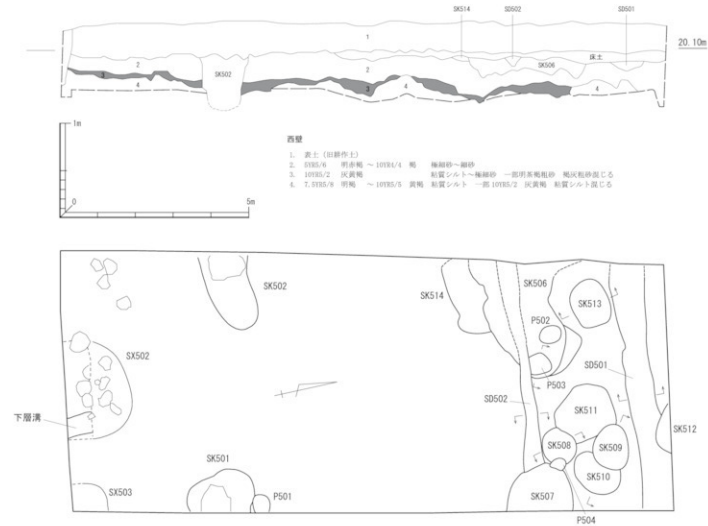
調査区北端で9基検出した。平面的に重なり、先後関係を持っているため、形状が不明なものもある。

土坑SK506

土坑SK506は西壁に接して検出した長さ3.1m、幅1.7mの不定形の土坑である。溝SD502に切られ、土坑SK514を切る。柱穴P502・P503とは平面的に重なっているものの、先後関係は不明である。検出面からの深さは14cm、埋土はにぶい黄褐色の細砂～極細砂である。調査区壁際を中心に瓦・土器の小片が出土している。

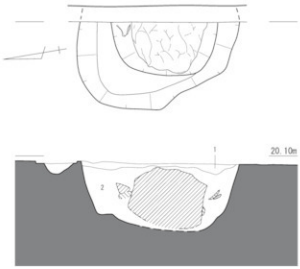
土坑SK507

土坑SK507は東壁に接して検出した。平面的には径1.6mの半円形を呈し、溝SD502を切り、柱穴P504に切られている。検出面からの深さは北半で18cm、埋土は褐灰色の細砂～極細砂である。瓦・土器の小片が出土している。



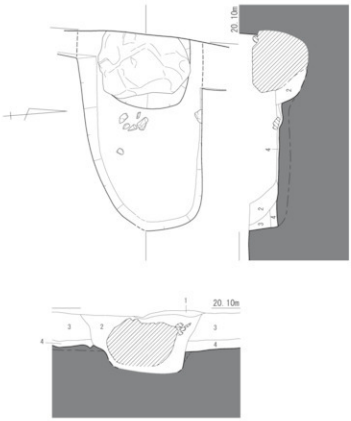
第19図　5区　平面・土層断面

SK501



1. 耕作土
2. 耕作土　明赤褐　黄褐土が混じる

SK502



1. 耕作土に黄色地山土が混じる
2. 耕作土　明赤褐　黄色土が混じる
3. 5YR5/6　明赤褐　極細砂～細砂
4. 10YR6/2　灰黄褐　粘質シルト～極細砂

0　2m

第20図　５区　遺構平面・土層断面１

土坑SK508

土坑SK508は直径90cmのやや歪んだ円形の土坑である。土坑SK511を切り、柱穴P504に切られている。検出面からの深さは9cm、埋土は灰黄褐色の細砂～極細砂である。

土坑SK509

土坑SK509は長径1.2m、短径0.9mの歪んだ楕円形を呈する。土坑SK510・511を切る。検出面からの深さは11cm、埋土は灰黄褐色細砂～極細砂である。

土坑SK510

土坑SK510は長径1.2m、短径0.9mの歪んだ楕円形を呈する。土坑SK509に切られる。検出面からの深さは11cm、埋土は粗砂混じりの灰黄褐色細砂～極細砂で、一部ににぶい黄褐色極細砂が混じる。

土坑SK511

土坑SK511は土坑SK508・509に切られる。長軸1.5m、短軸1.4mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さ11cm、埋土はにぶい黄褐色粗砂混じり極細砂～シルトである。瓦に混じり、ごく少量の土器片が出土した。

土坑SK512

土坑SK512は南壁際で検出した。溝SD502を切っている。深さ24cmで埋土はにぶい黄褐色粗砂混じり極細砂である。大部分が調査区外に伸びるため、形状・規模は不明である。

土坑SK513

土坑SK513は長軸1.3m、短軸0.95mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは5cmで埋土は灰黄褐色粗砂混じり極細砂～細砂である。

土坑SK514

土坑SK514は西壁際で検出した。長さ2.1mでSK506に切られる。形状は不明確である。検出面からの深さ6～14cmで、埋土は灰黄褐色極細砂～細砂である。

溝状遺構

調査区北端で2条検出した。

溝SD501

溝SD501は幅約90cmを測り、検出した深さは浅いもののほぼ東西の方位に沿っていることから、何らかの区画を示す溝である可能性がある。

溝SD502

土坑SK506を切り、土坑SK507にきられる。東西方向に走り、検出面からの深さ4～7cmと浅く、幅は40cm程度である。埋土は灰黄褐色極細砂～細砂である。

柱穴

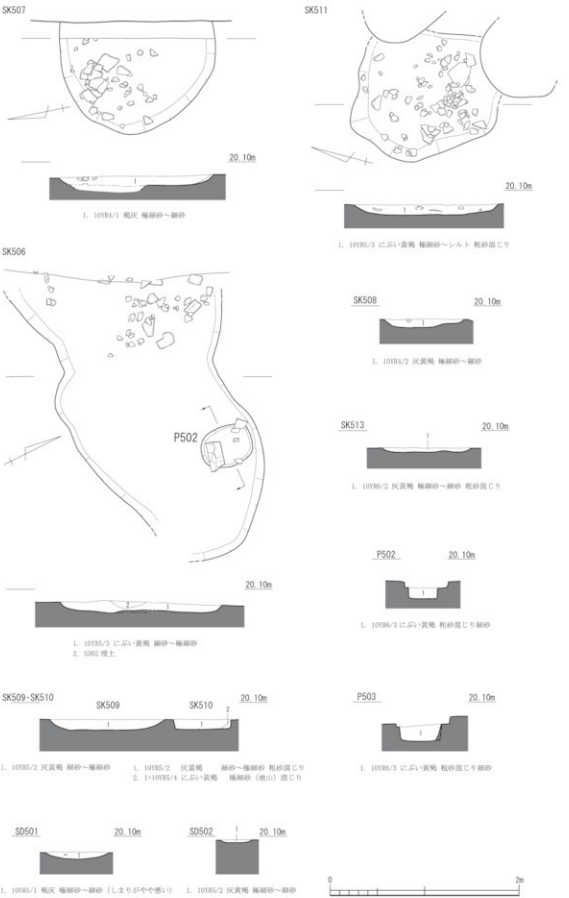
土坑SK501に隣接して1基、瓦廃棄土坑と平面的に重なって2基検出した。

柱穴P501

柱穴P501は土坑SK501に接して検出した。埋土に旧耕作土が多く含まれることから、稲木の痕跡と考えられる。

柱穴P502

柱穴P502は土坑SK506と平面的に重なっている。長径58cm、短径44cmの楕円形を呈する。残存する深さは20cmで、柱痕部分の埋土はにぶい黄褐色粗砂混じり細砂である。完形に近い丸瓦と平瓦片が出土した。



第21図　5区　遺構平面・土層断面2

P503

柱穴P503は土坑SK506と平面的に重なり、溝SD502に切られる。一辺50～60cmの隅丸方形を呈する。残存する深さは30cm、埋土はにぶい黄褐色粗砂混じり細砂である。

P504

柱穴P504は土坑SK507・508を切る。径30cmで歪んだ円形である。埋土はにぶい黄褐色細砂である。杯蓋のつまみ（50）が出土している、

不明遺構

不明遺構SX502

調査区南端部で平板な岩石が集中した箇所が認められた。これらの岩石は層位的に第２層上半にあたる。整地土中に存在することから、外部から持ち込まれたものと考えられる。

不明遺構SX503

不明遺構SX503は調査区南東隅で検出した土坑状の浅い落ち込みである。

下層遺構

調査区南端、岩石集中地点の下層で溝状遺構の一部を検出した。上面の幅50cm、底部幅15cm、深さ約50cmである。付近から古墳時代末の須恵器が出土している。

今回の調査で検出された遺構は、いずれも駅館院関連遺構として捉えられるものである。特に礎石の可能性を持つ遺構が２基検出されたことで、調査区を含む部分に主要な殿舎があった可能性が高くなった。お、今回検出された礎石土坑について、脇殿の棟柱である可能性、東西方向の溝（SD501）については、脇殿と正殿を区画する溝である可能性が調査委員会で指摘された。

４．SK501・502出土石材の鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

兵庫県姫路市太市駅付近の向山遺跡では、古代山陽道の路線や駅館院の所在地の確認のための発掘調査が行われている。今回の報告では、発掘調査時に検出された建物の礎石を対象として、石材鑑定を実施し、石材の種類や産地等について検討する。

（１）試料

鑑定の対象とした試料は、古代以降と推定される礎石より採取された、SK501遺構およびSK502遺構から出土した礎石より採取された破片２点である。試料の状況写真および拡大写真を図版１に示す。

（２）分析方法

石材鑑定は、野外用ルーペ等を用いて行い、石材表面の鉱物や組織を観察し、五十嵐（2006）の分類基準に基づき、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。なお、正確な岩石名の決定には、岩石薄片による観察や、蛍光X線分析、X線回折分析などを併用するが、今回は実施していないため、鑑定された岩石名は概査的な岩石名である点に留意されたい。

（３）結果

各試料の観察結果を以下に示す。

SK501礎石破片：細粒完晶質で白色を帯びる。白色を呈するカリ長石斑晶に富み、次いで灰色を呈する石英および斜長石の斑晶が中量程度観察される（第22図１c）。これらのことから、花崗岩と同定した。

SK502礎石破片：黒色を示し、輝石斑晶が微量散在し、ややガラス質の岩相である（第22図２c）。これらのことから、本試料は輝石デイサイトと同定した。

（4）考察

向山遺跡が所在する兵庫県姫路市太市付近の地質は、地域地質研究報告　５万分の１地質図幅「龍野」（山元ほか,2000）に概略が示されている。山元ほか（2000）によれば、白亜紀中期の流紋岩火山礫凝灰岩･凝灰角礫岩、角礫岩からなる伊勢層が分布している。伊勢層を貫入して、花崗斑岩、花崗閃緑斑岩、流紋岩、デイサイトからなる白亜紀後期−古第三紀の岩脈が分布している。また、岩脈と同年代を示す花崗閃緑岩が遺跡南東の桜山貯水池周辺に分布している。

SK501礎石に使用されている花崗岩は、細粒完晶質で白色を帯びる岩相を示す。遺跡周辺に花崗岩の岩体の分布は知られていないが、花崗閃緑岩の岩体が遺跡南東に分布していることから、遺跡近傍より礎石に使用されている花崗岩の入手は可能であったとみられる。

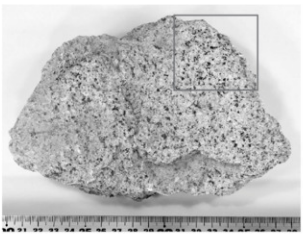
SK502礎石に使用されている輝石デイサイトは、斜長石斑晶が微量散在し、黒色を帯びる岩相を示す。伊勢層を貫入した貫入岩体としてデイサイトが知られており、この岩脈近傍において採取可能であったと考えられる。

以上、調査を行った建物の礎石は、いずれも調査区周辺で入手可能な石材であったと推定されるが、入手経路については当該期の人間活動に関する考古学的調査成果に基づく評価が必要である。

引用文献

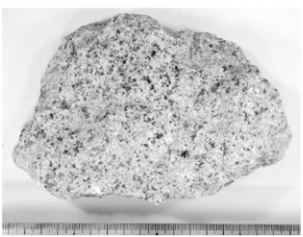
五十嵐俊雄2006『考古資料の岩石学』パリノ・サーヴェイ株式会社（194p）

山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和2000『地域地質研究報告　５万分の１地質図幅「龍野」』地質調査所



1a. SK501礎石（表）：花崗岩

2a. SK502礎石（表）：輝石デイサイト



1b. SK501礎石（裏）：花崗岩

2b. SK502礎石（裏）：輝石デイサイト

1c. SK501礎石：拡大（1aの枠範囲）

1c. SK502礎石：拡大（2aの枠範囲）

第22図　SK501・502出土石材の肉眼鑑定

第３節　出土した遺物（図版28～34　写真図版35～50）

出土遺物は土器・瓦・石器・木器などがあり、28リットル入りのコンテナで49箱分の出土量があった。このうち、瓦の出土量が一番多かった。以下、土器と瓦に分けて調査区ごとに詳細を説明する。

１．土器

平成25年度

１区（第23図　写真図版３）

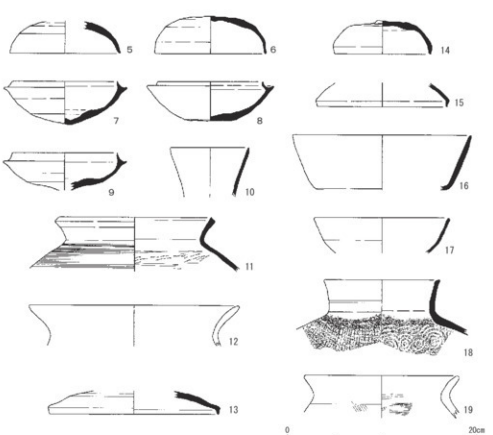
１～４は須恵器である。１は器台の坏部口縁部である。大きく開き、口縁端部は面を作る。外面はクシ描波状文を重複して施す。２は須恵器坏Ｂ蓋の口縁部で。端部の屈曲はやや外反気味である。外面には自然釉による重ね焼きの痕跡が残る。３は坏Ａで底部から口縁部にかけて直線的に延びる。底部はヘラ切後ナデている。４は坏Ｂ蓋の摘みである。扁平で頂部がやや盛り上がる。

第23図　１区　出土遺物

２区（第24図　写真図版７～９）

最下層土坑SK200

須恵器坏Ｈ蓋（５・６）、坏Ｈ身（７～９）、瓶類（10）、甕（11）と土師器甕（12）がある。



第24図　２区　出土遺物

5・6は坏H蓋で天井部はヘラ切り未調整である。6は口縁部と天井部の境が屈曲する。7～9は坏H身で立ち上がりは短く内傾して折り返す。底部はヘラ切り未調整である。7は著しく歪んでいる。10は甕類の口頸部で外方に直線的に延び、内面に絞りの痕跡を残す。11は須恵器甕で口縁部は外方に大きく開き、口縁部に段を有し、端部は外傾する。頸部は回転ナデ、体部はカキ目を行っているためタタキ痕跡は僅かに残る。体部内面はナデを行っているため、同心円当て具の痕跡が僅かに残る。12は土師器大型の甕の口縁部で磨滅が著しく、調整は不明である。

遺構に伴わない遺物

中央地山直上

13は須恵器坏B蓋で口縁端部の屈曲がやや鋭い。天井部は回転ケズリの後、ナデて仕上げている。

側溝北

14は坏H蓋で口縁部と天井部の境が屈曲し、天井部はヘラ切り未調整である。15は坏B蓋で天井部は盛り上がっており、口縁端部の屈曲は鋭い。16は高台の有無は不明の坏である。底部から口縁部にかけて外方に直線的に延びる。底部は回転ケズリの後、ナデで仕上げている。17は須恵器椀で体部は口縁に向かって内弯して立ちあがる。18は須恵器甕で口縁部は直線的に外方に僅かに開き、沈線が一条めぐる。体部の外面には格子風タタキが、内面には同心円当て具の痕跡が残る。19は土師器甕で口頸部は外反し、体部外面は斜め方向、内面は横方向のハケ調整を行う。

平成26年度

3－1区（第25図　写真図版13）

SD303

20は土師器坏Aで、底部から後円部にかけて内弯気味に立ち上がる。器壁は摩耗している。

SD304

21は須恵器鉄鉢形鉢Aである。底部は丸底で、体部は口縁に向かって内弯して立ちあがり、口縁端部は面を作る。底部から体部の半分は丁寧な回転ケズリを行う。

SD306

23は須恵器皿Bの底部で、三角高台を貼り付け、丁寧にナデている。

SK301

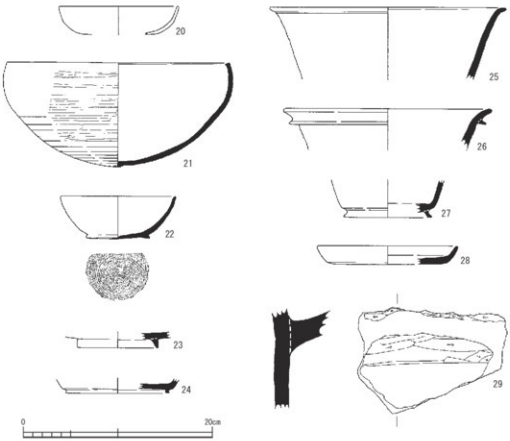
22は須恵器椀で底部は糸切の平高台で、体部は口縁に向かって内弯気味に立ちあがる。

SK302

24は須恵器坏Bで底部外周近くに低い高台を貼り付ける。26は須恵器器台で大きく外反する口頸部の口縁直下に鋭い突帯を貼り付ける。

遺構に伴わない遺物

25は須恵器器台で直線的に外方に開く口頸部から口縁端部は沈線を一条加え外方に折り返す。27は須恵器坏Bの底部で外方に開く高台を貼り付ける。28は須恵器皿で、緩く内弯しながら立ち上がる。底部外面は回転ケズリ後ナデを行い、内面は自然釉が掛かっている。29は須恵器の大型品の破片で陶棺か鴟尾であろう。



第25図　３区　出土遺物

４区（第26図　写真図版25・26）

４－１区

３点図化した。遺構は検出していないので、すべて遺構に伴わない遺物である。

30は須恵器坏Bの底部で、三角高台を貼り付け、丁寧にナデている。31は須恵器長頸壺のから頸体部の破片で、分割整形後、頸部を挿入接合している。頸部には沈線がめぐる。32は須恵器甕の口頸部で、大きく外傾し開き、口縁端部は上方へ屈曲させる。頸部外面はクシ歯状列点を施文した後、二条の沈線で区画している。

４－２区

ｉ）土器・土製品

SD403

SD403からは須恵器坏Iと須恵器坏Aが出土している。33は須恵器坏Iで、口縁部が内弯気味に開き、底部はヘラ切り後、ナデて仕上げている。34は須恵器坏Aで、平坦な底部から体部が緩く内弯しながら立ち上がる。底部外面は不定方向のケズリを行いナデている。

流路

35・36は須恵器坏Iで底部の切り離しはヘラ切である。内面に縦方向のヘラによる沈線が存在するが、全容は不明である。37は灰釉陶器瓶類の高台部分で大きく外反している。本体部分の内面は突き押しの痕跡が残る。外面に薄く釉が掛かる。38は須恵器坏B蓋で、扁平な天井部に口縁端部は短く屈曲する。天井部外面は回転ケズリ後、回転ナデを行っている。39は須恵器皿Bの底部で、底部外面は回転ケズリを行い、直立した高台を貼り付け

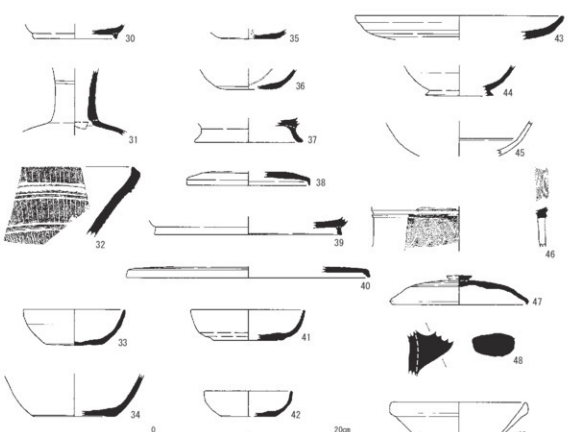
てナデている。40は須恵器皿B蓋で、平坦な天井部に口縁端部は短く屈曲する。天井部外面は回転ケズリ後、丁寧なナデを行い仕上げている。41は須恵器坏Iで、口縁部が直立気味に開き、底部はヘラ切り後、丁寧にナデている。

遺構に伴わない遺物

42は須恵器坏Iで、口縁部が内弯気味に開き、底部はヘラ切りである。43は須恵器皿口縁部で、端部のみ緩く内弯しながら立ち上がる。底部外面は回転ケズリ後ナデを、内面はミガキを行っている。44は須恵器椀で、底部は平高台で突出している。底部の切り離しは回転糸切りである。45は緑釉陶器椀で見込みに段を有し、横方向にミガキを行い、全体に淡緑色の釉を掛けている。46は須恵器器台の脚台部で、上面は受け部が剥離したカキ目の圧痕が付着する。外面は突帯間にクシ描波状文を施文する。長方形の透かしを有するが、間隔やサイズは不明である。47は須恵器坏B蓋で、天井部が盛り上がり、口縁端部は短く屈曲する。天井部外面は回転ケズリ後、扁平な摘みを貼り付け、ナデている。48は須恵器甕の体部および把手部分で体部外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕跡で整形しているが、把手を貼り付けるためナデ消しており、タタキ痕跡がわずかに残る。把手は断面形が楕円形である。49は白磁碗で玉縁の口縁部で、体部外面は回転ケズリを行い灰白色の釉を掛けている。

ⅱ）木製品（第28図）

W1は流路最下層から出土した。厚さ0.6cmの薄い板材で木取りは柾目である。付け木の可能性があるが、炭化した箇所は認められない。



第26図　4区　出土遺物

５区（第27図　写真図版37）

遺物は瓦廃棄土坑、溝等が集中した調査区北端部を中心に出土している。出土した遺物のほとんどは瓦の破片であり、平瓦に比べて、丸瓦の量が少ない。また、軒部の残る瓦は含まれていない。

土器類

P504

50は扁平な形状を示す須恵器坏蓋のつまみ部分である。

SK506

51は坏H蓋である。わずかに残る天井部に回転ヘラ削りの痕跡が残り、口縁部は回転ナデを施している。52は坏の底部である。回転ヘラ切りのあとナデで仕上げる。

SK507

53は杯G蓋である。内側のカエリは短く内湾気味である。

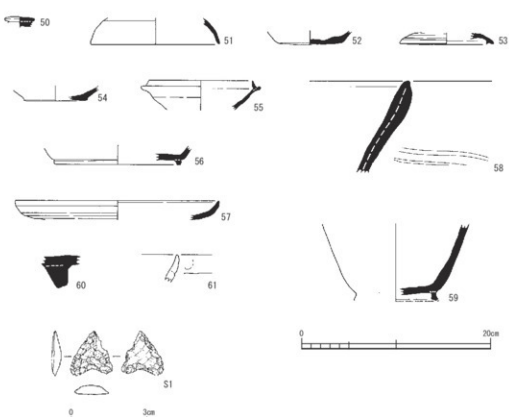
SK511

54は杯あるいは椀の底部である。平底で底部外面は回転糸切りを行う。

遺構以外の遺物

55は坏H身である。口縁部から体部半ばは回転ナデを行っている。包含層から出土した。

56は杯Bあるいは皿Bの底部である。底部外面に回転ヘラケズリを施し、高台を貼り付ける。包含層から出土した。



第27図　５区　出土遺物

57は皿Aである。口縁部は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリを施している。包含層から出土した。

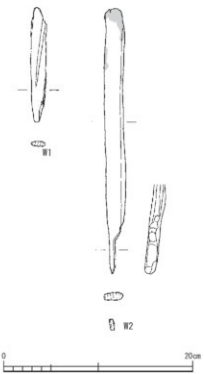
58は甕の口縁部と考えられる。口縁部は折り曲げて肥厚させており、焼けひずみ、折り曲げた接合面に空隙が生じ、膨張している。口縁部とは平行しない沈線が2条巡らされている。

59は壺の体部下半から底部の破片である。高台がつく。体部は回転ナデで成形し、底部内側は灰被り、貼り付けられた高台にも自然釉が付着する。58・59は整地層下の第3層から出土した。

60は形態不明である。脚状の部分として実測したが、内面に粘土がはがれた痕跡がある。表土から出土した。

61は土師器の口縁部である。ナデで仕上げる。調査区南端の2層で出土した。製塩土器の口縁部と考えられる。

62は緑釉陶器の細片である。器種は不明で遺構検出時に出土した。



第28図　木製品

石器

S1は打製石鏃である。片面は微細な調整剥離を施すが、もう一方は大きな剥離面が残り、刃部のみに調整剥離を行っている。遺構検出時に出土した。

木器

W2は付け木と考えられる棒状の木製品である。先端が炭化している。加工痕があるため、何らかの木製品の破片を利用して、着火具としたようである。

土器類まとめ

1区から5区の調査で最も古い土器は古墳時代中期に位置づけられる器台（46）の破片である。他に同時期の遺物がほとんど認められないため、今回の調査範囲には当該期の遺構が存在する可能性は低いが、向山遺跡周辺の丘陵上には古墳群や古墳時代の窯跡群が存在しており、それらに関係する集落が将来確認される可能性は高い。

次に遺物が認められるのは7世紀前半～中頃のものである。土器類の中ではこの時期のものが多くを占め、2区と5区で確認されている。2区のものはヘラ切り未調整ではあるが坏Hが主体であることからやや7世紀でも前半のもので、5区などで見られる坏Gについては7世紀半ばまで下ると考えられる。ただ、量が多いにもかかわらず、遺構としては明確なものがないので、調査委員会では初期駅家に伴うものと考えるよりは周辺の窯跡などに起因する遺物ではないかとの指摘があった。

8世紀前半の遺物に関しては、ほぼ調査区全体で見つかっており、瓦類とともに向山遺跡を特徴付けるものである。坏Bや皿などの食器類を中心に出土しており、3－1区の鉄鉢形鉢のように極めて精良なものも含まれている。瓦葺き駅館院が調査範囲に存在した可能性を示す資料であろう。

10世紀後半のものでは、平高台で糸切りが認められる須恵器椀が4区・5区で出土しており、5区では緑釉陶器片も出土している。

12世紀末から13世紀初頭では4－2区で見つかった森田・横田分類の白磁碗Ⅳ類が代表的なもので、全体を見ると駅家が営まれた時期を表す資料が多いといえよう。

2．瓦

今回の調査では前述のように出土遺物の大半を瓦が占める。しかし、遺構面削平や耕作等の作用により、細かく砕けたものが非常に多い。出土瓦の種類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が認められた。

軒丸瓦（第30図、写真図版14） T３～６

軒丸瓦は４点出土している。瓦当文様は単弁十六葉蓮華文と考えられ、周囲に１条の圏線をもつ。中房の蓮子は１＋８で、いずれも長坂寺式と考えられる。丸瓦部の凹面凸面とも縦方向のヘラケズリが施されている。瓦当裏面はナデもしくはヘラケズリが施されている。焼成はやや軟質で、色調は灰白色のものが多い。胎土に含まれる砂粒はやや多い。

軒平瓦（第30・35図、写真図版15・38） T７・８・31

軒平瓦は３点出土している。T７・８は瓦当部の破片である。瓦当文様は均整唐草文で、外区の珠文帯をもつ。花頭形の垂飾りをもち、中心の十字形の縦軸が上方に伸びることから、長坂寺式と考えらえる。顎部形態は、曲線顎Ⅱで顎面幅は約3cmを測る。顎面はヨコナデ、顎部裏面は斜め方向のナデが施されている。焼成はやや軟質で、色調は灰白色である。胎土に含まれる砂粒は少ない。

T31は平瓦部の破片である。凸面はタテ方向のヘラケズリが施されている。凹面は布目が認められ、端部の内側２cm程度の位置で布端の圧痕が認められる。焼成は軟質で、色調は灰色である。胎土に含まれる砂粒は少ない。

丸瓦（第31・34・35図、写真図版15・22・38） T９～11・23・26・32～34

丸瓦は平瓦に比べてかなり少なく、全形を知りうる個体も存在しない。丸瓦部の幅は16.6cm（T９）と16.3cm（T34）のものがある。凸面は縦方向のナデが確認されるもの（T23・T33）、ヨコ及び斜め方向のナデが確認されるもの（T10）、ナデと思われるもの（T32・34）と縄目が残存するもの（T11・26）がある。凹面はおおむね布目が残存する。丸瓦部端縁は凹面側を幅広く削るもの（T９・10・34）、凹凸両面側を幅広く削るもの（T26）、削らないもの（T11）がある。側縁は凹面側を幅広く削るもの（T９～11・32・34）と削らないもの（T23・33）がある。玉縁部の長さは5.3cm（T23）と5.9cm（T29）のものがある。

平瓦

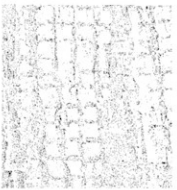
今回の調査では多量の平瓦が出土している。凸面のタタキ目の種類により分類する（第29図）。

Ｈ１類（第30～32・34・36・38図、写真図版９・15・16・22・39・41）T１・12～16・24・35～38・47

Ｈ１類は、凸面に方形正格子のタタキ目をもつものである。タタキ目の１辺は10㎜～7.5㎜とややばらつきがある。凹面は布目が残り、布端が確認できるものがある（T13・15・16）。部分的にナデが施されているものもある。

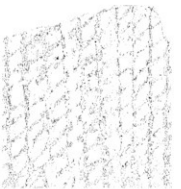
側面の調整は側面のケズリの後、凹面側縁を１回削るもの（T１・12～15・24）と複数回削る（T16・36・38・47）ものがある。端部の調整は端面のケズリの後、凹面側端縁を削るもの（T12・13・24・36・47）、凹凸両端縁を削るもの（T15）、端面のみを削るもの（T14・35・37）がある。

全長が判明するものはT35のみで37.5cmである。厚さは２cm前後のものが多い。胎土に含まれる砂粒は多く

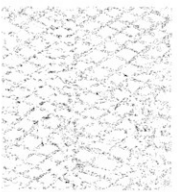


H１類　T15

H２類　T39



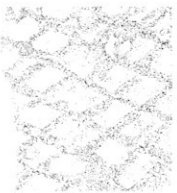
H３類　T18



H４類　H41

H５類　T27

H６類　T28



H７類　T29

H８類　T20

H９類　T2

H10類　T30

第１表　平瓦の出土個体数

	H１類 正格子	H２類 方形斜格子	H３類 偏斜格子	H４類 横長斜格子Ⅰ	H５類 横長斜格子Ⅱ	H６類 横長斜格子Ⅲ	H７類 横長斜格子Ⅳ	H８類 平行	H９類 縄目太	H10類 縄目細	合計
１区	1		1								2
２区	7								1		8
３-１区	75		30	3				26	1	2	137
４-１区	22		18		2			24	5		71
４-２区	22		16	6	1	1	1	11	6	3	67
５区	40	1	20	20	2	1		12	10	6	112
表採	7		2					1			10
合計	174	1	87	29	5	2	1	74	23	11	407
割合（%）	42.9	0.2	21.4	7.1	1.2	0.5	0.2	18.2	5.7	2.7	

第29図　タタキ目分類図

なく、焼成も比較的良好なものが多い。

H２類（第37図、写真図版40） T39

H２類は、凸面に方形斜格子のタタキ目をもつものである。タタキ目の１辺は約１cmである。１点しか出土していない。凹面は摩滅している。端部の調整は端面のケズリのみである。胎土に含まれる砂粒は多くなく、焼成は軟質である。

H３類（第33・34・37図、写真図版17・22・40） T17～19・25・40

H３類は、凸面に偏斜格子のタタキ目をもつものである。タタキ目の１辺は10㎜程度の部分が多い。凹面は布目が残り、部分的に縦方向のナデが施されている。布端が確認できるものがある（T18）。

側面の調整は側面のケズリのみのもの（T40）と側面のケズリの後、凹面側縁をやや幅広に１回削るもの（T18・19・25）がある。端部の調整は端面のケズリのみのもの（T17・18・25・40）と、凹面側端縁を削るもの（T19）がある。

厚さは２cm前後のものが多い。胎土に含まれる砂粒はやや多く、焼成は比較的良好なものとやや軟質のものがある。

H４類（第37図、写真図版40） T41・42

H４類は、凸面に横長斜格子のタタキ目（横長斜格子Ⅰ）をもつものである。タタキ目の１辺は５㎜から12㎜とバラツキが大きいが、８㎜程度の部分が多い。長軸は11㎜～17㎜、短軸は５㎜～７㎜である。凹面は布目が残り、布端が確認できるものがある（T41）。

側面の調整は側面のケズリのみのもの（T42）と側面のケズリの後、凹面側縁をやや幅広に１回削るもの（T41）がある。端部の調整は端面のケズリの後、凹面側端縁を削っている（T41）。

厚さは２cmと2.5cmで、胎土に砂粒を含み、焼成も比較的良好である。

H５類（第34・38図、写真図版22・41） T27･43

H５類は、凸面に横長斜格子のタタキ目（横長斜格子Ⅱ）をもつものである。タタキ目の１辺は10㎜から17㎜とバラツキが大きい。長軸は25㎜程度、短軸は５㎜～６㎜である。凹面は布目が残る。

側面の調整は側面のケズリの後、凹面側縁をやや幅広に１回削るもの（T27）がある。

厚さは1.85cmと2.55cmで、胎土に砂粒を多く含み、焼成も比較的良好である。

H６類（第33・38図、写真図版22・41） T28･44

H６類は、凸面に横長斜格子のタタキ目（横長斜格子Ⅲ）をもつものである。タタキ目の１辺は15㎜前後で、長軸は30㎜前後の部分があり、短軸は５㎜～６㎜である。残存部分が小さく詳細は不明である。凹面は布目が残り、端面際２cmほどの範囲はナデが施されている。出土は図示した２点のみである。

端部の調整は端面のケズリのみのもの（T44）と端面のケズリの後、凹面側端縁を削るもの（T28）がある。

厚さは1.8cmと2.0cmで、胎土に砂粒を多く含み、焼成も比較的良好である。

Ｈ７類（第34図、写真図版22） T29

Ｈ７類は、凸面に横長斜格子のタタキ目（横長斜格子Ⅳ）をもつものである。タタキ目の１辺は20㎜～17㎜である。長軸は30～35㎜、短軸は18㎜～20㎜である。凹面は布目が残る。出土は図示した１点のみである。

側面の調整は側面のケズリの後、凹面側を幅広に１回削っている。端部の調整は端面のケズリの後、凹面の端面際２cmほどの範囲削っている。

厚さは1.75cmで、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。

Ｈ８類（第33図、写真図版17） T20･21

Ｈ８類は、凸面に平行条線のタタキ目をもつものである。条線の間隔は12㎜程度で、条線間は浅くＵ字形にくぼんでいる。凹面は摩滅により痕跡は不明である。

側面の調整は側面のケズリの後、凹面側を１回削っている。端部の調整は端面のケズリのみである。

厚さは1.73cmと1.8cmで、胎土に砂粒を多く含み、焼成は軟質である。

Ｈ９類（第30・33・38図、写真図版９・17・41） T２・22･45

Ｈ９類は、凸面に縦方向の縄目のタタキ目をもつものである。縄目の間隔は４～５㎜である。雌砂が付着するものがある（T45）。凹面は布目が残る。

側面の調整は側面のケズリのみのもの（T２）、側面のケズリの後、凹面側縁をやや幅広に１回削るもの（T45）、側面にナデが施され、凸面側縁を１回削るもの（T22）がある。端部の調整は端面のケズリの後、凹面側端縁を削っている。

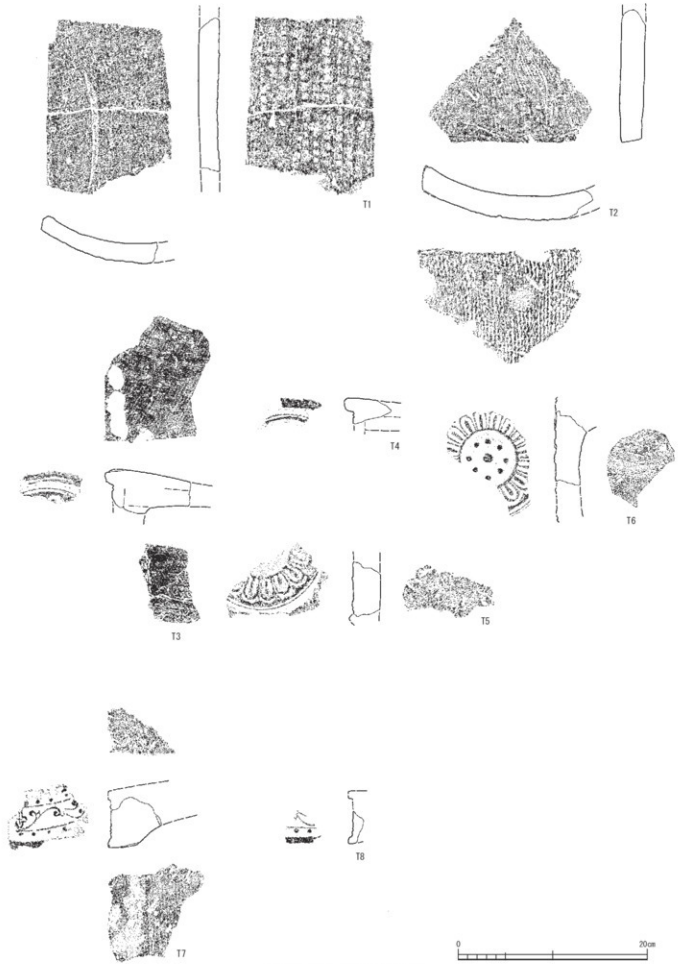
厚さは2.1cm～2.6cmで、胎土に砂粒を含み、焼成は比較的良好なものとやや軟質のものがある。

Ｈ10類（第33・37図、写真図版22・41） T30・46

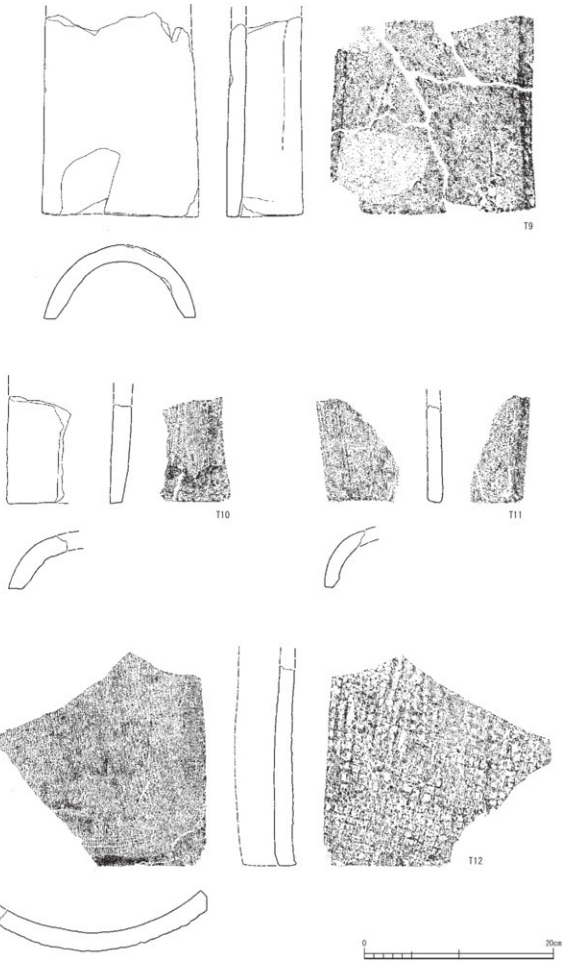
Ｈ10類は、凸面に縦方向の縄目のタタキ目をもつものである。縄目の間隔は３㎜である。凹面は布目が残る。

側面の調整は側面のケズリの後、凹凸両面側の側縁を削っている（T46）。

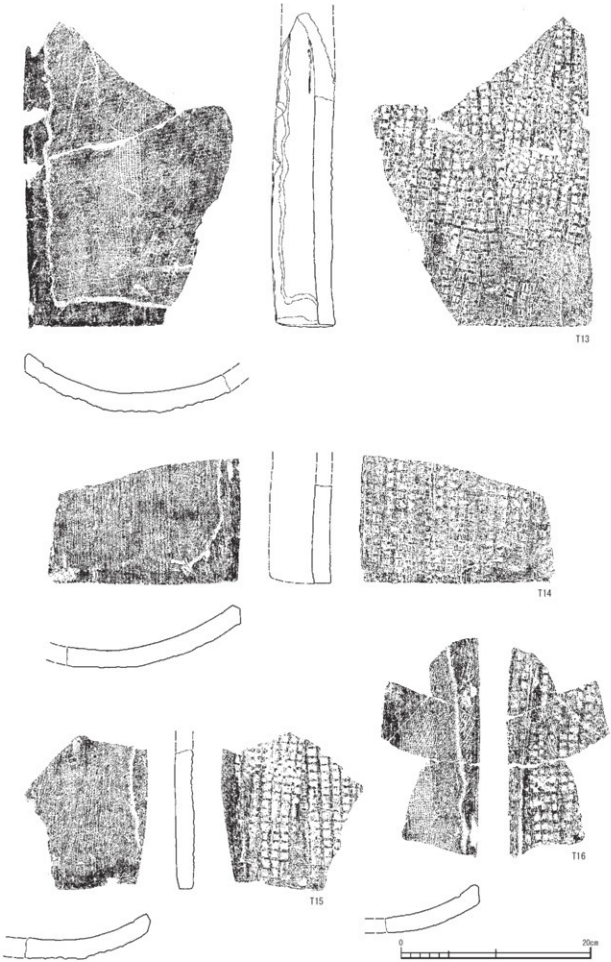
厚さは1.8cmと1.95cmで、胎土に砂粒をわずかに含み、焼成は比較的良好なものとやや軟質のものがある。



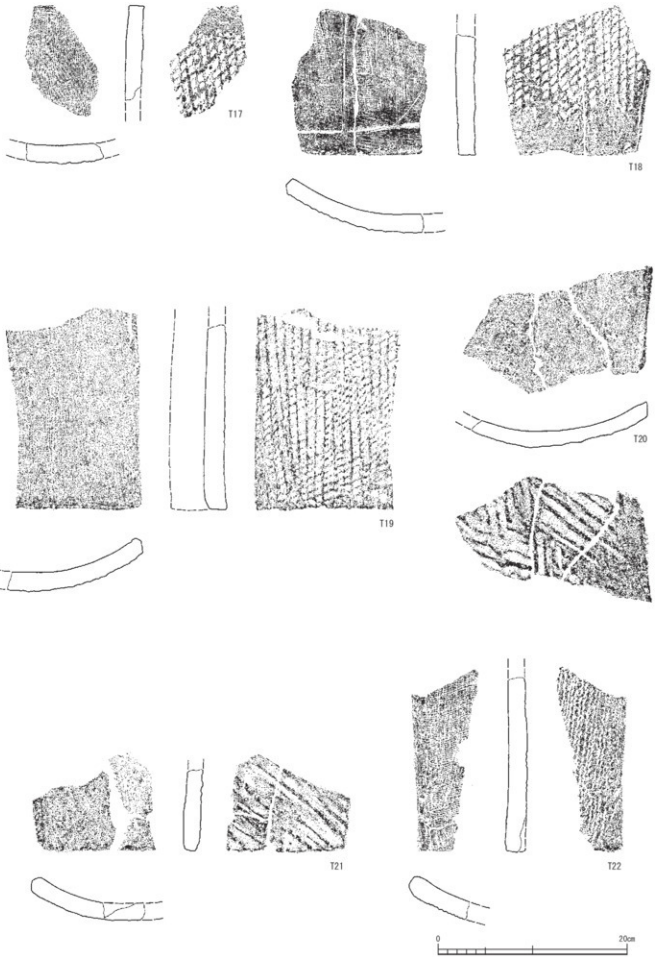
第30図　瓦１（２区・３－１区）



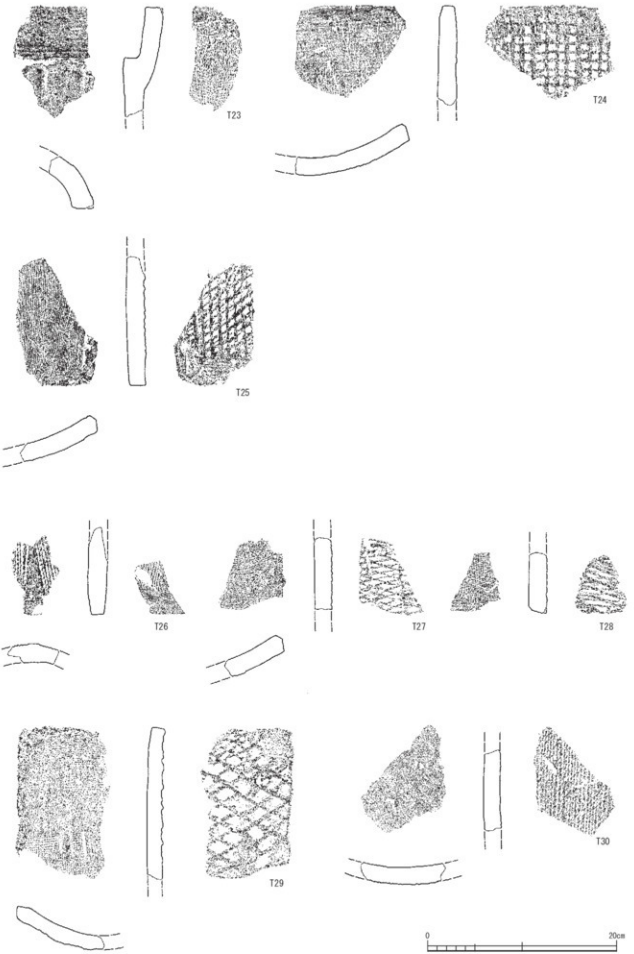
第31図　瓦2（3－1区）



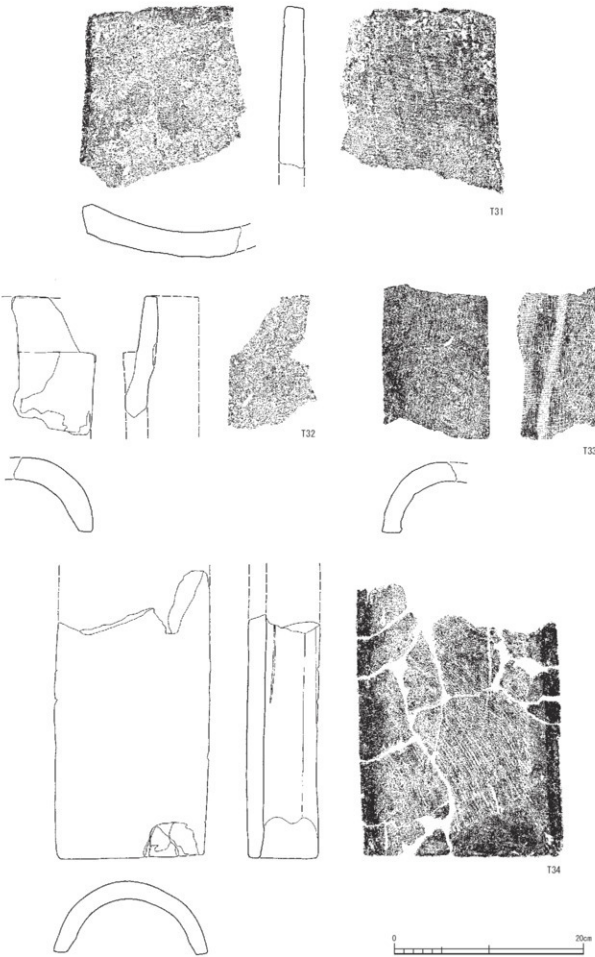
第32図　瓦３（３－１区）



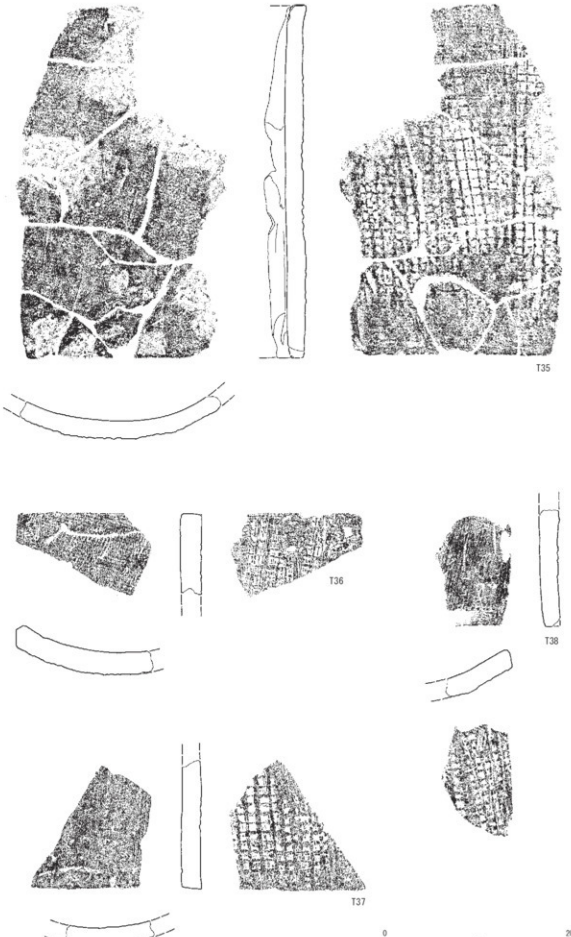
第33図　瓦４（３－１区）



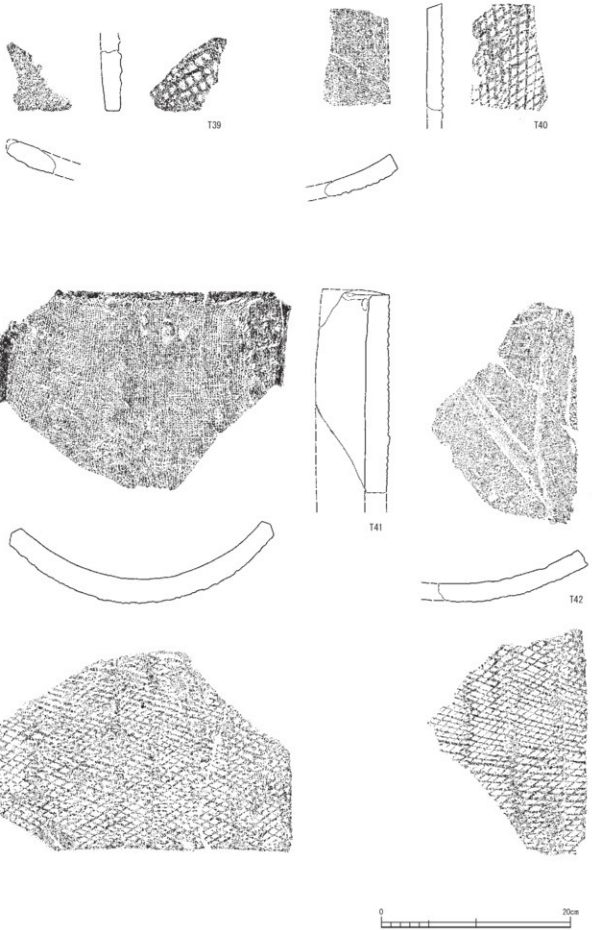
第34図　瓦５（４－１区）



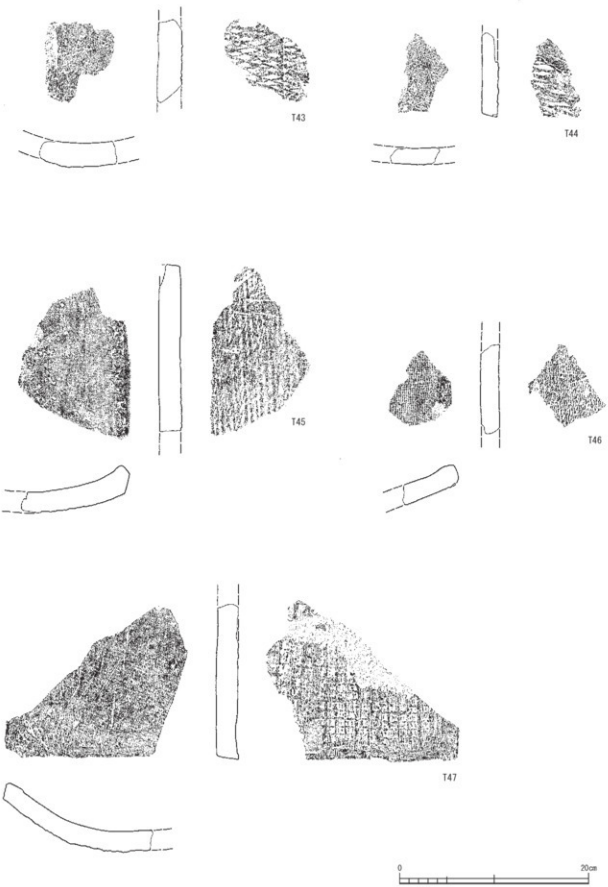
第35図　瓦６（５区）



第36図　瓦７（５区）



第37図　瓦８（５区）



第38図　瓦９（５区）

第２表　出土遺物（土器・鉄製品・木製品）一覧表（１）

報告番号	掲図番号	写真図版番号	種別	器種	法量（cm）			出土地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
1	23	3	須恵器	器台		2.8+		1区		中	
2	23	3	須恵器	蓋	(14.7)	1.5+		1区		中	
3	23	3	須恵器	杯A	(14.7)	2.9	(11.3)	1区		中	
4	23	3	須恵器	蓋	摘み3.4	1.2+		1区	北拡1	砂層	
5	24	8	須恵器	蓋	(11.7)	3.3+		2区	SD202		
6	24	7・9	須恵器	杯H蓋	11.7	4.0		2区	SD202		
7	24	7・9	須恵器	杯H	立ち上がり11.1 受け部12.5	4.2		2区	SD202		
8	24	7・9	須恵器	杯H	立ち上がり(11.1) 受け部(12.9)	4.2		2区	SD202	中	
9	24	8	須恵器	杯H	立ち上がり(11.1) 受け部(12.6)	4.0+		2区	SD202		
10	24	-	須恵器	瓶	(8.2)	5.3+		2区	SD202	最下層	
11	24	7・9	須恵器	甕	16.2	5.8+		2区	SD202		
12	24	8	土師器	甕	(22.3)	4.3+		2区	SD202		
13	24	8	須恵器	蓋	(17.9)	2.5+		2区	中央	面上	
14	24	8	須恵器	杯H蓋	(10.1)	3.6		2区		中	
15	24	8	須恵器	蓋	(13.8)	2.6+		2区		中	
16	24	8	須恵器	杯	(18.9)	5.8+	(14.1)	2区		中	
17	24	8	須恵器	椀	(14.2)	3.8+		2区		中	
18	24	8	須恵器	直口壺	(12.2)	5.9+		2区		中	
19	24	8	土師器	甕	(16.3)	4.5+		2区		中	
20	25	13	土師器	杯A	(12.6)	3.0	(9.0)	3-1区	SD303	炭層	
21	25	13	須恵器	鉄鉢形	(23.6)	11.1		3-1区	SD304		
22	25	13	須恵器	杯	(12.1)	4.5	6.8	3-1区	SK301	下層	
23	25	13	須恵器	皿		1.7+	(8.5)	3-1区	SK306		
24	25	13	須恵器	杯B		1.6+	(11.0)	3-1区	SK302	下層	
25	25	13	須恵器	瓶	(25.3)	7.7+		3-1区	面精査		
26	25	13	須恵器	器台	(22.2)	4.4+		3-1区	SK302	側溝	
27	25	13	須恵器	瓶類		4.0+	(9.4)		表採		
28	25	13	須恵器	皿	(14.9)	2.0	(12.8)	3-1区 中央		床土 側溝	
29	25	13	須恵質	陶棺？							
30	26	20	須恵器	杯B		1.6+	(8.8)	4-1区			
31	26	20	須恵器	長頸壺		7.1+		4-1区			
32	26	20	須恵器	長頸甕		7.5+		4-1区			
33	26	20	須恵器	杯I	10.7	3.9	6.0	4-2区	SD403		
34	26	-	須恵器	杯A？		4.5+	9.1	4-2区	SD403		
35	26	21	須恵器	杯I		1.1+	(6.2)	4-2区③			
36	26	21	須恵器	杯I		2.2+	(7.0)	4-2区②	流路	下層	
37	26	21	須恵器	壺？		2.6+	(11.6)	4-2区②	流路側溝	褐砂礫	
38	26	21	須恵器	杯B蓋	(13.1)	1.5+		4-2区④	流路	2層	

第３表　出土遺物（土器・鉄製品・木製品）一覧表（２）

報告番号	掲図番号	写真図版番号	種別	器種	法量（cm）			出土地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
39	26	21	須恵器	皿B		1.9+	(20.0)	4－2区④	流路	２層	
40	26	21	須恵器	皿B蓋	(25.8)	1.2+		4－2区②	流路		
41	26	21	須恵器	杯Ｉ	(12.0)	3.3	(7.4)	4－2区②	流路		
42	26	21	須恵器	杯Ｉ	(9.2)	2.7	(6.0)	4－2区①		遺構検出時	
43	26	21	須恵器	皿	(22.1)	2.5+		4－2区③			
44	26	21	須恵器	椀		3.3+	(7.2)	4－2区③			
45	26	21	緑釉陶器	碗		3.8+		4－2区③			
46	26	21	須恵器	器台		4.2+		4－2区①			
47	26	21	須恵器	蓋	(14.4)	3.2		4－2区③			
48	26	21	須恵器	把手		6.2+		4－2区④			
49	26	21	白磁	碗	(14.2)	3.7+		4－2区①			
50	27	37	須恵器	蓋	摘み径3.3	(1.1)		5区	P504		
51	27	37	須恵器	杯H蓋	(13.7)	(2.8)		5区	SK506		
52	27	37	須恵器	杯		(1.5)	(6.7)	5区	SK506		
53	27	37	須恵器	杯G蓋	(10.1)	(2.0)		5区	SK502段落ち		
54	27	37	須恵器	杯		(1.6)	(6.8)	5区	SK511		
55	27	37	須恵器	杯H	(11.1)	(3.2)		5区		南側溝	
56	27	37	須恵器	杯B or 皿B		(2.1)	(13.4)	5区		包含層	
57	27	37	須恵器	皿or高杯	(21.7)	(2.1)	(19.9)	5区		包含層	
58	27	37	須恵器	壺		(9.9)		5区	SX502	右下（灰褐シルト）	
59	27	37	須恵器	長頸壺		(8.3)	(9.0)	5区		灰褐シルト	
60	27	37	須恵器	？		(3.5)		5区		表土	
61	27	37	土師器	製塩土器	不明	(3.0)		5区	SX501～SX503周辺		
62	－	37	緑釉陶器	碗				5区		表土	
M1	－	8	鉄滓					2区	北落ち	７層（礫）	7点写真のみ
					長さ	幅	厚み				
S1	27	37	打製石器	石鏃	17.6mm	16.6mm	3.7mm	5区	調査区北端	包含層（面検出）	
W1	28	21	木製品	付け木？	12.3	1.6	0.6	4－2区③	流路	最下層	
W2	28	37	木製品	付け木	28.3	2.0 0.5	0.9 1.2	5区	SX502	右下（灰黄褐シルト）	

第４表　出土瓦一覧表

番号	器種	分類	法量（cm）				布目（本/1cm）	地区	遺構	層位
			長	幅	厚	その他				
T01	平瓦	Ｈ１類	(18.8)	(13.0)	2.1		7×7	2区	SD201	上層
T02	平瓦	Ｈ９類	(13.9)	(18.3)	2.6		10×9	2区	包含層	SD201より南
T03	軒丸瓦	長坂寺式	(9.1)					3-1区	瓦溜まり	調査区外壁
T04	軒丸瓦	長坂寺式	(5.0)					3-1区	SK302	
T05	軒丸瓦	長坂寺式			2.9	瓦当面径（6.7）		3-1区	包含層	
T06	軒丸瓦	長坂寺式				内区径（12.7）中房径（6.4）		3-1区	瓦溜まり SK301	
T07	軒平瓦	長坂寺式	(9.75)			瓦当面幅(6.0		3-1区	SK301	
T08	軒平瓦	長坂寺式				瓦当面縦（3.4）		3-1区	SK302	
T09	丸瓦		(21.4)	16.6	1.8			3-1区	SK302	下層
T10	丸瓦		(11.3)	(6.2)	2.0		7×10	3-1区	SK301	
T11	丸瓦		(11.6)	(4.3)	1.6		8×6	3-1区	SK302	
T12	平瓦	Ｈ１類	(22.7)	(22.2)	2.0		11×9	3-1区	SK302	
T13	平瓦	Ｈ１類	(32.7)	(21.8)	2.1		8×8	3-1区	SK302	下層
T14	平瓦	Ｈ１類	(13.8)	(18.5)	1.8		9×8	3-1区	SK302	
T15	平瓦	Ｈ１類	(16.8)	(13.3)	2.1		7×8	3-1区	SK302	
T16	平瓦	Ｈ１類	(23.5)	(10.0)	1.8		6×7	3-1区	SK302	
T17	平瓦	Ｈ３類	(11.7)	(8.2)	1.9		6×9	3-1区	P313	
T18	平瓦	Ｈ３類	(16.4)	(14.7)	2.1		7×6	3-1区	SK302	下層
T19	平瓦	Ｈ３類	(21.6)	(14.5)	2.2			3-1区	SK302	下層
T20	平瓦	Ｈ８類	(13.6)	(18.7)	1.7			3-1区	SK302	
T21	平瓦	Ｈ８類	(10.5)	(12.2)	1.8			3-1区	SK302	下層
T22	平瓦	Ｈ９類	(19.8)	(6.5)	2.1		5×5	3-1区	SK302	
T23	丸瓦		(11.6)	(4.8)	2.0		8×6	4-1区	包含層	
T24	平瓦	Ｈ１類	(10.5)	(12.3)	2.0		6×7	4-1区	包含層	
T25	平瓦	Ｈ３類	(13.9)	(6.2)	2.0		6×9	4-1区	包含層	
T26	丸瓦		(9.6)	(5.4)	2.0			4-2区	包含層	
T27	平瓦	Ｈ５類	(8.35)	(6.3)	1.9		8×8	4-2区	包含層	
T28	平瓦	Ｈ６類	(6.6)	(6.4)	2.0		5×7	4-2区	包含層	
T29	平瓦	Ｈ７類	(16.2)	(9.35)	1.8		7×6	4-2区	流路	1層
T30	平瓦	H10類	(12.5)	(9.1)	1.8			4-2区	SD402	
T31	軒平瓦		(19.3)	(16.9)	2.6		7×7	5区	SK507	
T32	丸瓦		全（14.7）玉縁5.9 胴（8.8）	(8.9)	2.4			5区	SK502	
T33	丸瓦		胴部（16.7）	(7.95)	2.0		7×5	5区	SK506	
T34	丸瓦		(30.6)	16.3	1.9		8×8	5区	P502	
T35	平瓦	Ｈ１類	(37.4)	(21.3)	2.0			5区	SK507	
T36	平瓦	Ｈ１類	(9.1)	(14.7)	2.3		9×7	5区	SK507	
T37	平瓦	Ｈ１類	(14.1)	(14.2)	2.1		7×8	5区	P502	柱痕
T38	平瓦	Ｈ１類	(13.2)	(8.1)	2.2		7×7	5区	SK502	
T39	平瓦	Ｈ２類	(8.0)	(8.2)	2.2			5区	包含層	面精査
T40	平瓦	Ｈ３類	(11.5)	(8.3)	1.8		6×7	5区	SK507	
T41	平瓦	Ｈ４類	(21.7)	(28.4)	2.5		5×7	5区	SK511	
T42	平瓦	Ｈ４類	(24.8)	(16.1)	2.0		9×8	5区	SK511	
T43	平瓦	Ｈ５類	(9.6)	(9.7)	2.6		8×11	5区	包含層	
T44	平瓦	Ｈ６類	(8.9)	(6.8)	1.8		8×9	5区	SK506	
T45	平瓦	Ｈ９類	(18.5)	(11.6)	2.4		10×10	5区	SK501	
T46	平瓦	H10類	(9.7)	(8.1)	2.0		6×7	5区	SK501	
T47	平瓦	Ｈ１類	(17.2)	(18.8)	2.3		7×7		表採	

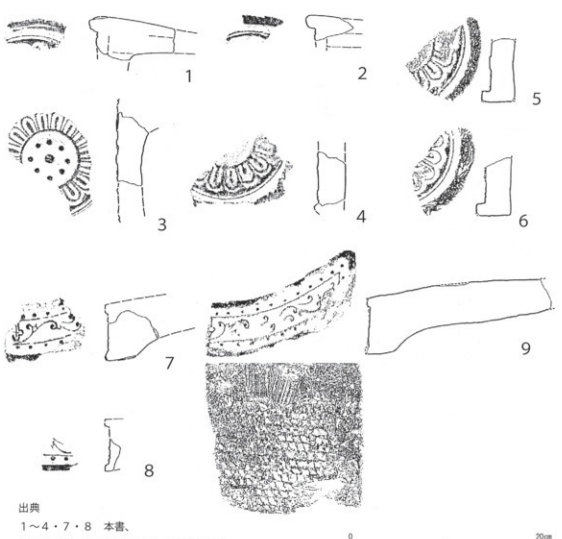
第５章　調査研究成果

第１節　向山遺跡出土の瓦

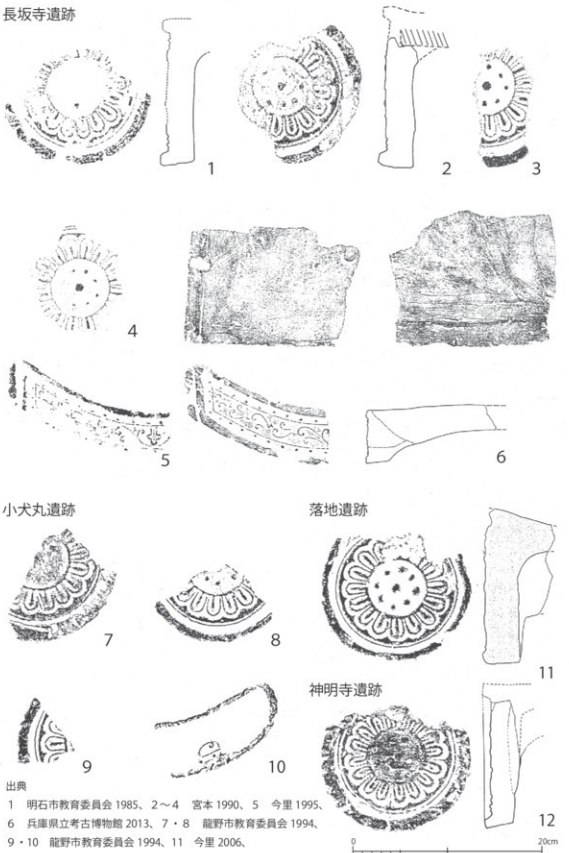
１．長坂寺式軒瓦について

向山遺跡で出土した軒瓦は今回の出土品と過去の表採品を合わせて軒丸瓦７点、軒平瓦３点が知られるにすぎない（第40図）。その他にかつて古大内式と考えられる軒丸瓦が出土したとされる伝聞情報があるものの（姫路市史編集専門委員会2010）、現物あるいは図・写真で現在確認できるものは、いずれも長坂寺式軒瓦である。

長坂寺式軒瓦の出土が確認されているのは15箇所で（今里2013）、駅家推定地で５箇所、寺院跡で６箇所、性格不明を含むその他の種類の遺跡は４箇所である。駅家推定地は播磨の西端から東端の市町村の範囲に及ぶが、それ以外の遺跡では加古川市の野口廃寺を除けば、姫路市域に集中している。



第39図　向山遺跡出土の軒瓦



出典

1　明石市教育委員会 1985、2～4　宮本 1990、5　今里 1995、
6　兵庫県立考古博物館 2013、7・8　龍野市教育委員会 1994、
9・10　龍野市教育委員会 1994、11　今里 2006、
12　西播流域史研究会 1991

第40図　長坂寺式軒瓦の出土例（1）

播磨国分寺跡

播磨国分尼寺跡

辻井廃寺跡

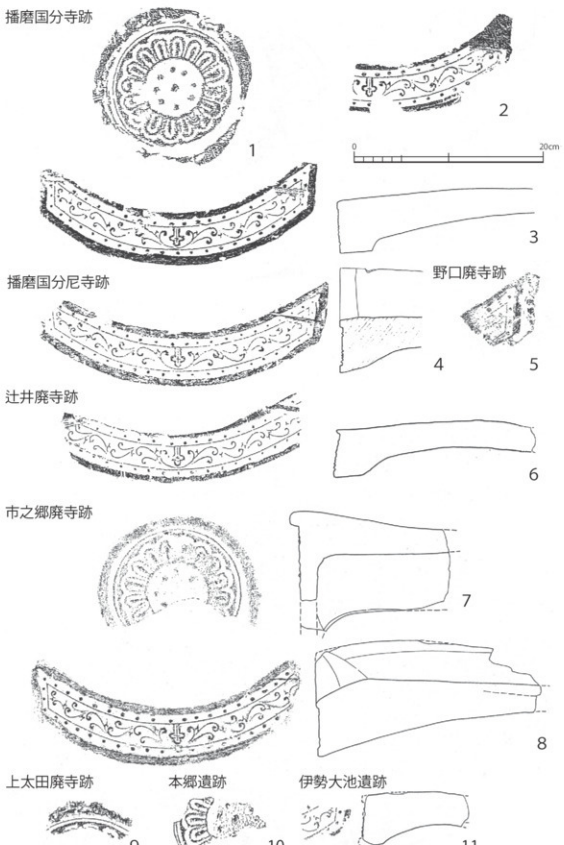
野口廃寺跡

市之郷廃寺跡

上太田廃寺跡

本郷遺跡

伊勢大池遺跡



出典　1・2・6・9～11　姫路市史編集専門委員会 2010、3　今里 1992、4　井内古文化研究室 1990、5　加古川市教育委員会 2004、7・8　兵庫県まちづくり技術センター 2013

第41図　長坂寺式軒瓦の出土例（2）

軒平瓦は笵の痛み具合によって前後関係を確認できるものがある。第１段階：右端に笵傷が確認できないもの（向山遺跡、伊勢大池遺跡）、第２段階：右端に笵傷が確認でき、左端に笵傷が確認できないもの（播磨国分尼寺跡、市之郷廃寺跡）、第３段階：左右両端に笵割れが生じているもの（播磨国分寺跡、辻井廃寺跡）の３段階に分かれる。第２段階のうちに左端の笵傷は大きく割れた状態になっており、第３段階でも、播磨国分寺跡よりも辻井廃寺跡のほうが左端の笵割れの進行が見られる。

軒平瓦については技法的に特徴のあるものが見受けられる。ほとんどのものは顎部が曲線顎の形状をもつが、第２段階の市之郷廃寺でのみ顎部が曲線顎でなく直線顎の形状となっている。長坂寺遺跡と野口廃寺跡では、側面側の周縁に「キリトリスジ」が認められる（垣内2013）。技法が一定しないことが確認され、今後、瓦笵の変化と関連して技法的な検討が必要である。

第５表　長坂寺式軒瓦の出土遺跡

	遺跡名	所在地	軒丸瓦	軒平瓦	備考
1	長坂寺遺跡	明石市	Ⅰ型	1 or 2	駅家推定地
2	野口廃寺跡	加古川市	Ⅰ型	2 or 3	
3	御国野町御着字小寺前	姫路市		○	
4	播磨国分寺跡	姫路市	Ⅰ型	3	
5	播磨国分尼寺跡	姫路市		2 or 3	
6	本郷遺跡	姫路市	Ⅰ型		
7	市之郷廃寺跡	姫路市	Ⅰ型	2	
8	阿保遺跡	姫路市	Ⅰ型		
9	辻井廃寺跡	姫路市		3	
10	向山遺跡	姫路市	Ⅰ型	1	駅家推定地
11	下太田廃寺跡	姫路市	Ⅰ型		
12	伊勢大池遺跡	姫路市		1	
13	小犬丸遺跡	たつの市	Ⅰ型	○	駅家推定地
14	神明寺遺跡	赤穂郡上郡町	Ⅱ型		駅家推定地
15	落地遺跡	赤穂郡上郡町	Ⅰ型		駅家推定地

軒丸瓦は単弁16葉蓮花文のⅠ型とⅠ型の祖形的な文様の複弁８葉蓮花文のⅡ型に分かれるとされているが（今里1992）、Ⅱ型は神明寺遺跡出土例のみである。その他は全てⅠ型と考えられるが、軒平瓦のように笵傷の進行などや技法的な差異は確認できない。

軒丸瓦・軒平瓦とも出土しているのは長坂寺遺跡、向山遺跡、小犬丸遺跡、播磨国分寺跡、市之郷廃寺跡である。向山遺跡と市之郷廃寺では長坂寺式が多数を占め、長坂寺遺跡では古大内式、北宿式と拮抗し、小犬丸遺跡ではごくわずかの出土量である。落地遺跡では軒丸瓦のみが一定量出土しているが、主体を占める古大内式と比べるとかなり少ない。遺跡により供給量に差があるものの、セットで供給されている場合が多いように思われる。

胎土については県立考古博物館で保管する向山遺跡、長坂寺遺跡、市之郷遺跡出土の軒丸瓦・軒平瓦を比較すると、白色砂粒が目立つものが多いことが共通しており、各遺跡で明瞭に異なるものはない。市之郷廃寺跡出土のものはやや砂粒が多いと感ぜられる程度である。

向山遺跡出土の長坂寺式軒瓦は初期の第１段階のものであり、駅家所用瓦として使われ始めたものと考えられる。胎土からみると他の遺跡出土品とよく類似しており、生産地（の属する地域）が共通する可能性が考えられる。ただし、技法的な差異も存在することから今後の十分な検討が必要である。

また、軒平瓦の平瓦部凸面に認められるタタキ目は、実見していないため板の方向が判明しないが、平瓦の向きどおりなら、右下がりの偏斜格子と考えられ、向山遺跡出土の平瓦とはタタキ目が一致しないことから、軒平瓦と平瓦の製作地は異にする可能性が考えられる。

２．平瓦について

平瓦は凸面のタタキ目の種類によって分類し、個体数の計数をおこなった（第29図）。ただし、出土瓦は細片化し、表面が摩滅したものが多いことから、計数を行いえたものは半分以下である。ナデ・ケズリもしくは無文

タタキの存在については確定しがたいことから、計数のうえでは考慮にいれていない。

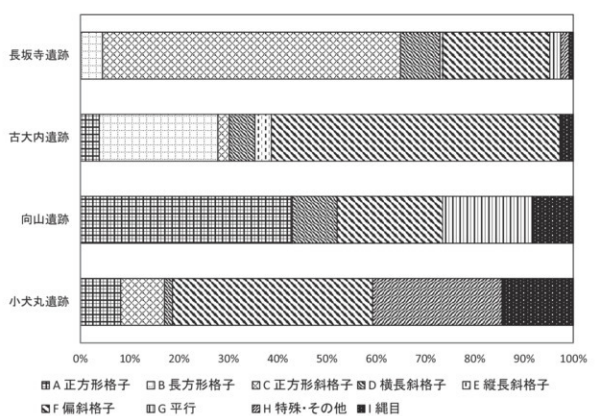
タタキ目は10種類に分類したが、おおまかなタタキの種別は格子タタキが73.4%、平行タタキが18.2%、縄目タタキが8.4%である。H1類の正格子タタキがもっとも多く42.9%を占め、H3類の偏斜格子タタキが21.4%とそれに次いでいる。

他の駅家遺跡での主要なタタキ目の比率を見てみると、長坂寺遺跡では正方形斜格子が60.5%、偏斜格子が21.7%、古大内遺跡では偏斜格子が58.6%、長方形格子が24.0%、小犬丸遺跡では偏斜格子が40.7%、縦線＋斜格子が23.4%を占めている（兵庫県立考古博物館2010・2013、山根1986）。偏斜格子タタキは全ての遺跡である程度の割合用いられているが、その他の型式は各遺跡で異なっている。同じタタキ目の原体が用いられたことが明瞭なものを確認することはできなかった。向山遺跡H1類と小犬丸遺跡AⅠbはタタキ目の原体は共に劣化しているため同定は難しいが、かなり類似している。凹面にナデが部分的に施されている点や布目の端が確認できることから、同産地の可能性が考えられる。ただし、全体からすると各遺跡の平瓦はそれぞれの生産地で作られた可能性が高いと思われる。

第6表　平瓦タタキ目の出土比率

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
	正方形格子	長方形格子	正方形斜格子	横長斜格子	縦長斜格子	偏斜格子	平行	特殊・その他	縄目
小犬丸遺跡	8.1		8.9	1.6		40.7		26.2	14.5
向山遺跡	42.9		0.2	9.1		21.4	18.2		8.4
古大内遺跡	3.8	24.0	2.3	5.2	3.3	58.6			2.7
長坂寺遺跡	0.1	4.4	60.5	8.0	0.6	21.7	2.2	1.7	0.9

※長坂寺遺跡・古大内遺跡は重量比、向山遺跡・小犬丸遺跡は個体数比



参考文献

明石市教育委員会 1985『明石市史資料（考古篇）』第 4 集

井内古文化研究室 1990『東播磨古代瓦聚成』

今里幾次 1980『播磨考古学研究』精文舎

今里幾次 1992「龍野市小犬丸遺跡の古瓦」『布施駅家』龍野市教育委員会

今里幾次 1995『播磨古瓦の研究』真陽社

今里幾次 2006『野磨駅家出土の古瓦』『古代山陽道　野磨駅家跡』上郡町文化財調査報告 4

今里幾次 2013「播磨国府系瓦の展望」『姫路市史』第 1 巻下　本編　考古

加古川市教育委員会 2004『野口廃寺発掘調査概要報告書』

垣内拓郎 2013「市之郷廃寺出土瓦」『市之郷遺跡Ⅴ』兵庫県文化財調査報告第 454 冊
　兵庫県教育委員会

上郡町教育委員会 2005『落地遺跡（八反坪地区）』上郡町文化財調査報告 3

上郡町教育委員会 2006『古代山陽道　野磨駅家跡』上郡町文化財調査報告 4

龍野市教育委員会 1992『布勢駅家―小犬丸遺跡 1990・1991 年度発掘調査概報』
　龍野市文化財調査報告 8

龍野市教育委員会 1994『布勢駅家―小犬丸遺跡 1992・1993 年度発掘調査概報』
　龍野市文化財調査報告 11

西播流域史研究会 1991『有年考古館蔵品図録』

姫路市史編集専門委員会 2010『姫路市史』第 7 巻下　資料編　考古

兵庫県まちづくり技術センター 2013『市之郷遺跡Ⅴ』兵庫県文化財調査報告第 454 冊

兵庫県立考古博物館 2010『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第 384 冊
　兵庫県教育委員会

兵庫県立考古博物館 2013『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第 455 冊
　兵庫県教育委員会

宮本郁雄 1990「播磨の古瓦－赤松啓介氏採集品より－」『神戸市立博物館研究紀要』第 7 号

山損実生子 1986「瓦」『小犬丸遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告書第 47 冊　兵庫県教育委員会

第２節　向山遺跡の遺物散布状況からみた大市駅家の推定

古くから向山遺跡は瓦が散布していることで知られており、多くの瓦が採集されている。

今回の調査で出土した遺物の大部分は瓦であるため、瓦の散布状況を中心に向山遺跡について考える事にする。発掘調査では、遺構を完掘していないものもあるが、調査区単位ごとの遺物の出土量を重量によって見ることにする。

第７表　向山遺跡出土遺物統計

	瓦 (kg)	須恵器 (kg)	土師器 (kg)	調査面積 (㎡)	瓦密度 (kg/㎡)
１区	0.9	0.5	0.2	31.4	0.0
２区	5.6	1.9	0.6	51.1	0.1
３-１区	77.7	2.7	0.1	51.0	1.5
３-２区	0.1	0.1	0.1	19.2	0.0
４-１区	53.7	2.9	0.3	12.6	4.3
４-２区	31.5	6.4	0.4	60.3	0.5
５区	83.0	6.5	0.5	112.0	0.7
全	252.5	21.0	2.2	342.6	0.7

総遺物重量は276.0kgであり、このうち、瓦は252.5kgと91.5％の割合を占める。瓦に続くのは須恵器21.0kgであり、7.6％、土師器2.2kg、0.8％であり、遺物のほとんどが瓦であることが判る。

次に今回調査を実施した調査区の瓦の分布状況について見ていく。

まず、瓦の出土量を見る。１区は0.9kg、２区は5.6kg、３区は畦を挟んで東側が３-１区、西側が３-２区とに分け、３-１区が77.7kg、３-２区が0.1kg、４区は畦を挟んで南側が４-１区、西側が４-２区と分け、４-１区が53.7kg、４-２区が31.5kg、５区は83.0kgである。一番多いのは５区の83.0kgであり、次いで３-１区の77.7kg、４-１区の53.7kgとなっている。逆に少ないのは３-２区の0.1kg、１区の0.9kgである。

ただし、この数字は見かけ上の数量であり、散布状況を示しているわけでは無い。このため、出土数量を面積で割った密度で比較することにする。１区は0.0kg/㎡、２区は0.1kg/㎡、３-１区は1.5kg/㎡、３-２区は0.0kg/㎡、４-１区は4.3kg/㎡、４-２区は0.5kg/㎡、５区は0.7kg/㎡で、全体では0.7kg/㎡である。このように、４-１区が4.3kg/㎡と際だって瓦の出土密度が高く、次いで３-１区の1.5kg/㎡、５区の0.7kg/㎡と続き、この３地区が平均以上の地区である。逆に瓦の出土密度が低い地区は１区と３-２区の0.0kg/㎡、２区の0.1kg/㎡である。

以上のように分布状況を見ていくと、瓦の出土密度が高い４-１区、３-１区、５区の３調査区は、いずれも後で述べる推定大市駅家駅館院の範囲内に含まれている。この中で特に出土密度が高い４-１区では遺構は検出できなかったが、耕土直下と基盤層の間に多量に瓦が包含されていた。３-１区と５区は瓦溜まりをはじめとする遺構から多量の瓦が出土している。

逆に、他の調査区の瓦の出土密度を見ていくと、推定大市駅家駅館院の範囲内から離れるにしたがって低くなる傾斜分布を示している。ただし、３-２区は密度の高い３-１区に隣接しているが密度0.0kg/㎡と極端が低い。これは削平が著しく耕作土直下が遺構検出面となっているため遺物包含層がほとんど存在しなかったからだと考えられる。また、遺構の密度が低く、なおかつ遺構の残存深度も浅いことも理由の一つである。ただし、３-１区と３-２区の間には南北溝SD321が存在しており、この溝が大きな境界になっている可能性が高い。駅家駅館院北側については、密度の高い４-１区に隣接している４-２区の南端の東西溝SD402までの間は瓦が多く出土しているが、東西溝SD402以北については、出土量が少ない事が、全体では密度0.5kg/㎡と比較的低くなっている理由である。

以上、瓦の出土密度が高い範囲は、３-１区と３-２区の間に位置する南北溝SD321の西側、４-２区の南端に位置する東西溝SD402の南側に囲まれた３-１区、４-１区、４-２区の南端、５区の範囲である。この範囲は後に述べる大市駅家駅館院に推定した範囲と重なる。また、聞き取り調査で、過去に多量に瓦が出土している地点

は、この瓦出土密度の高い地点と重なる。

第３節　大市駅家と山陽道駅路の復元

１．「馬屋田」の範囲

「馬屋田」の範囲は武藤（1978）によって示されていたが、今回大市駅家の調査をするにあたって、地籍図を確認したところ、範囲が間違っていることが判明した。東側と北側の境界については従来通りで修正は無いが、南西角の部分については、従来は向山池北側約50mの道路までが「馬屋田」の範囲内であるとされていた。今回新たに、道路より南側で向山池の北側迄の範囲も含まれていることが判明した。ただし、南東隅の山に接した30m×20mについては、一段高くなっており、「向山」範囲内である。

したがって、今回の調査地点は、すべて「馬屋田」の範囲内で実施したことになる。さらに、従来の瓦が多く出土していた地点のほとんども「馬屋田」の範囲内に入る事となった。また、後述する大市駅家駅館院に推定した範囲も一部を除いて、この「馬屋田」の範囲内に入ることとなる。

２．山陽道駅路

山陽道の駅路は桜峠以東の磨磨郡内および、揖保郡内の大津茂川東側の段丘上までと槻坂以西の揖保郡については、大方の一致を得ていた。しかし、大市駅家周辺では駅路の確定がなされていなかった。

近年の研究成果から、駅家は駅路に接していることが判明しており、大市駅家の場所決定に際しては駅路の確定が重要な要素になっていた。そこで、地籍図調査の後、駅路を確定する調査区である１区・２区・４区を設定し、駅路の痕跡を探した。このトレンチ調査により、１区南側の溝SD102を確認、２区の溝SD201、４区の溝SD404についてはほぼ一直線に溝が走っており、山陽道駅路の側溝の可能性が高まった。これを結んだラインの東の延長線上には馬山から北東に派生する「旗ノ山」の北端の山裾であり、西の延長線上は馬山から北東に派生する「向山」の北端の山裾である。方位はN-77°-Wである。この北側に２区は落ち込みSX201があり、この間が道路であると考えると幅14m程度になるが、削平されて基部のみ残っているため、路面幅は狭くなると考えられる。

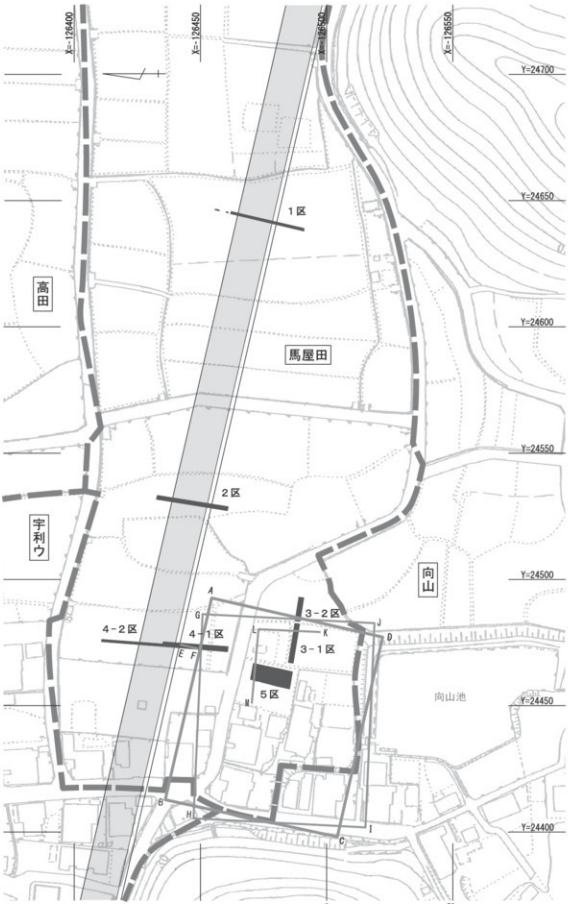
以上のように、いくつかの説が存在したが、足利健亮が推定した最短経路を指向する説に合致する。

また出土した遺物は細片のため、駅路の存続や廃止時期を特定できる良好な遺物は存在しなかったが、設置時期の上限の一端を示す溝を２区で検出した。溝SD202であり、道路側溝SD201が溝SD202を切っている。この溝SD202は須恵器がまとまって出土しており、７世紀前半に位置付けられる。したがって道路側溝の可能性が高いSD201は７世紀前半以降に開削されたものである事が判るが、開削時期を決定づけるものではない。

３．大市駅家

山陽道の駅路が確定できたため、以前からの瓦多量出土地点が山陽道駅路に接する事になった。調査の該当地は３区と５区と４区の一部である。この調査で検出した遺構は溝と柱穴、土坑である。溝は南北方向の溝と東西方向の溝があるが詳細は調査面積が狭いため不明である。

この地区の表層畦畔と検出した遺構をあわせて考える。３-２区で検出した溝SD321と４-２区で検出した溝SD402をそれぞれ東限、北限とする方形区画を考えると、地形から西側は山裾、南側は向山池の堤防になる。これを四周として復元すると東西82m、南北68mとなる。面積は5,600㎡弱となり、駅館院の規模が判明している野磨駅家などより一回り小さくなる。調査した溝の方向は誤差が大きいと考えられるため、畦畔や道路を基準に



第42図　大市駅家駅館院・古代山陽道駅路復元図

2案を復元した。1案はA-B-C-Dで道路に対して整合する案であり、2案はG-H-I-Jで、正方位に近い案である。1案はN-13°-Eであり、4-2区で検出した溝E-FがA-Bに直交する。2案はN-3°-Eで南辺は向山池の北辺堤防と重なることになる。さらに3-1区の南北溝群や5区の東西溝群が同方向を示す。

内部構造は、調査範囲が狭く建物が復元できなかった為不明である。ただし、礎石の落とし込み土坑や瓦廃棄土坑が存在したため瓦葺き建物があった事は確実である。また、礎石を伴わない柱穴も検出しているため、時期は不明であるが、掘立柱建物が存在していた可能性がある。いずれにしても推定した駅館院の内部の建物配置や時期については不明な点が多い。

4．西脇廃寺との関係

この大市駅家駅館院の位置は山陽道駅路を挟んで北に西脇廃寺が位置することとなる。これは駅館院北西角から北に延びる揖保郡条里方向の現道を北に進むと西脇廃寺に行き着く。現在西脇廃寺の寺域は明らかではないが、これが寺域の中心ラインになる可能性が高い。このことから西脇廃寺と大市駅家は計画的に配置された可能性が高い。

5．駅館院と地形の関係

今回の調査から駅家が存在する前の時代と、駅家が作られた時代の地形を見ていく。発掘調査した結果から、大きく二種類に分類できる。一つは沖積地であり、もう一つは大きく削平されている部分である。前者は道路部分であり、桜峠から槻坂の最短ルートに計画したため、今回調査した道路部分は比較的低い場所にあたっており、水が湧く様な条件の悪い部分であった。

これに対して、後者は駅館院部分であり、設置以前の地形は、向山の尾根から派生して東側に延びる緩やかな尾根であったと考えられる。現在、向山池の北側の堤防がその一部であると考えられる。さらに堤防の角から北東に延びる水路とその北側の間には段差があり、この段差が尾根の南側のラインであると考えられる。3-2区は大きく削平されており、5区は北に傾斜している。推定駅館院中心部は尾根地形を大きく削平して北側の駅路に向かって緩やかに傾斜する安定した地形を選んで設置した可能性が高い。

第4節　大市駅家調査と今後の課題

兵庫県立考古博物館の調査研究事業として、いくつか今後の課題とすべき点が残った。

1．駅館院の構造

今回の調査研究事業では大市駅周辺の山陽道駅路と大市駅家の位置は確定できたが、調査面積が少なかったため、内部構造は明らかにできなかった。今後の課題である。

今回、瓦葺礎石立ち建物である後期の大市駅家の位置については推定できたが、瓦葺以前の播磨国風土記に記載のある邑智駅家については、場所も含めて確定できなかった。今後検討する必要がある。

2．駅路との関係

大市駅家駅館院の輪郭については推測できたが、山陽道駅路から駅館院への進入路について考える必要がある。現在までに駅路と駅館院の進入路の関係が判明している駅家は野磨駅家、布勢駅家、賀古駅家がある。いず

れの駅家も駅館院は正方位である。布勢駅家は駅館院の南側に駅路が通っている為、南辺からのとりつき、野磨駅家は駅館院の西側に斜行する駅路が通っている為、西辺からのとりつき、賀古駅家は駅館院の東側に斜行する駅路が通っている為、東辺からとりついている。このように、これまで、北辺に駅路が伴うという事例がないため、道路に近い北辺から進入するのか、北側を避けて東辺から進入するのか、今後の検討する必要がある。

3．文字資料

今まで、報告した中であたかも大市が確定したかのように報告してきたが、厳密には、大市駅家であるとは言えない。小犬丸遺跡が布勢駅家であると確定したのには「驛」・「布勢」の墨書土器や木簡などの文字資料があったからである。小犬丸遺跡での文字資料は、駅館院外の周辺の関連遺構から出土している。このため、今後、今回検出した遺構を、大市駅家と確定できるような文字資料の出土を期待したい。そのためには周辺も含めて広い範囲での調査が必要である。

4．表層条里

第２章で触れたとおり、大市駅家周辺の表層条里は複雑である。揖保郡は古代・中世・近世と山陽道が南に移動していっている事が判っている。古代における直線指向の最短距離を目指した結果、地形条件が悪い場所を通った結果、修繕不可能になった可能性があり比較的早く移動したのではないかと考えられる。

また、播磨における駅家は通常の30里ではなく半分の15里で設置されており、存廃記録から主となる明石、賀古、草上、布勢、野磨の５ヶ所の駅家と、従となる中間の（仮称）邑美、佐突、大市、高田とがあった可能性がある。この従の駅家に大市駅家もあたり、桜峠・槻坂を避けて通るルートが早くから開かれた可能性がある。これが原因で新たな土地利用が各方面から展開し、複雑な表層条里になったのではないか。今後の検討課題である。

写真図版

遠景（上が北）

遠景（東から）

遠景（北東から）

遠景（西から）

全景（南から）

全景（北から）

上層溝SD101（東から）

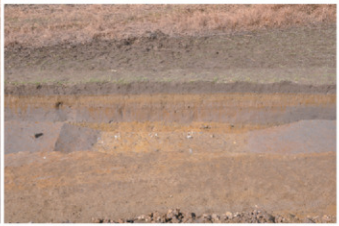
北側拡張区（南から）

西壁（東から）

出土遺物

全景（南から）

道路南側溝SD201検出状況（東から）



道路南側溝SD201（東から）

2区から推定大市駅家方面を望む（北東から）

全景（北から）

調査区北半（南東から）

落ち込みSX201（東から）

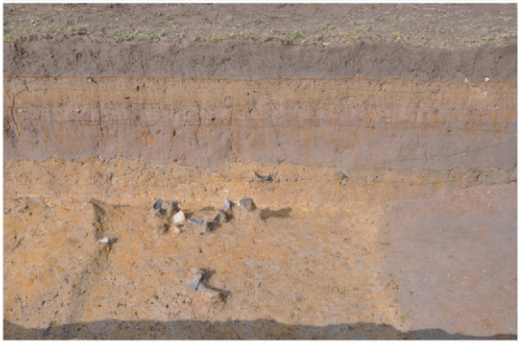
溝SD201と向山山裾（東から）

落ち込みSX201と向山山裾（東から）

落ち込みSX201と旗ノ山山裾（西から）

溝SD201と旗ノ山山裾（西から）

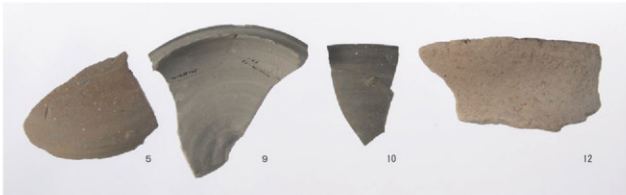
道路SF201
（東から）
（人が立っている場所が側溝の跡）



道路南側溝下層溝
SD202
遺物出土状況
（東から）

道路南側溝下層溝
SD201
遺物出土状況
（南東から）

出土遺物



出土遺物

出土須恵器

出土瓦

全景（西から）

3－1区　SK301　遺物出土状況（北東から）

3－1区　SK301　遺物出土状況（北から）

3－1区　SK301・302　遺物出土状況（北から）

3－1区　SK301・302　遺物出土状況（東から）

3－1区　SK301・302・SD306　完掘状況（北から）

3－1区　SK301・302・SD306　完掘状況（東から）

3－1区　東半遺構検出状況（西から）

3－1区　東半へ（南西から）

SK303・SD303・304・P308（南から）

SD302　断面（南から）

SD303　断面（南から）

全景（東から）

3－1区　SK303検出状況（南から）

3－1区　SK303（西から）

3－2区　SD321　検出状況（南から）

3－2区　SD321（東から）

3－2区　SD321　遺物出土状況（北から）

3－2区　P321断面（南から）

20

21

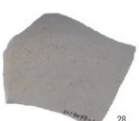
22

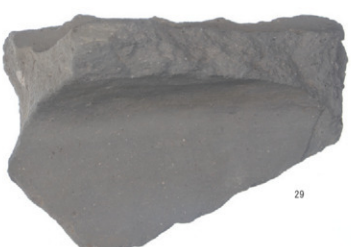
23

24

25

27


28


29

26

出土遺物

T3

T4

T5

T6

出土遺物

T7

T8

T9

T10

T11

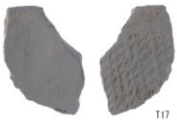
T12

F13

T14

T15

T16


T17

T18

T19

T20

T22

T21

全景（南から）

4－2区　全景（南から）

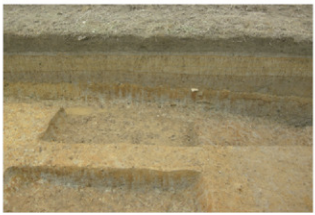
全景（南東から）

4－2区　南半部溝検出状況（北から）

4－2区　SD403（北東から）

4－2区　SD402断面（東から）

4－2区　SD403断面（南から）



4－2区　SD404断面（北東から）

4－2区

4－2区　全景（北から）

4－2区　西壁断面（北東から）

遠景（北から）

32

30

31

33

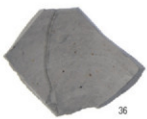
出土遺物

35

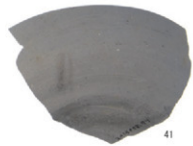
37

38

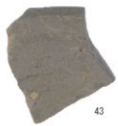
39


36

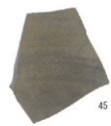
40


41

42


43

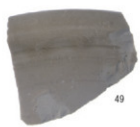
44


45

46

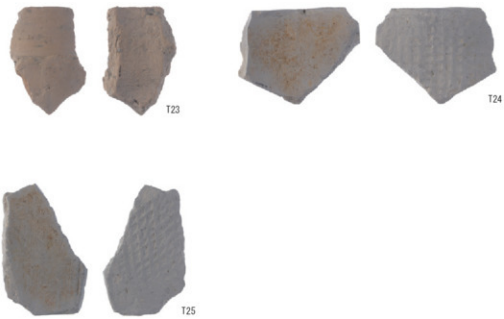
47

48

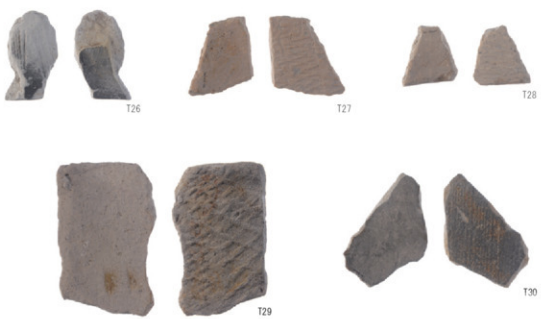

49

W1

出土遺物



4－1区　出土瓦

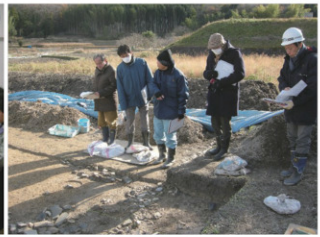


4－2区　出土瓦

調査風景（現地説明会）

第１回調査委員会

第２回調査委員会



調査状況（現地指導）

調査風景（現地説明会）

調査状況（機械掘削）

調査状況（　　）

調査状況（遺構養生）

推定古代山陽道

推定古代山陽道

推定古代山陽道

推定古代山陽道

大市駅家推定地

分布調査

分布調査

調査区全景（北から）

調査区全景（南から）

調査区北端部（西から）

調査区北端部（東から）

SK501（西から）

SK501（西から）

SK502（東から）

SK502（東から）

SK506　南北セクション（東から）

SK506　東西セクション（南から）

SK506　遺物出土状況（東から）

SK507　遺物出土状況（西から）

SK507　遺物出土状況（東から）

SK507　セクション（西から）

SK508　セクション（南西から）

SK509・SK510　セクション（南から）

SK511　セクション（西から）

SK511　遺物出土状況（南西から）

SK511　遺物出土状況（北東から）

SK513　セクション（北東から）

P502　遺物出土状況（西から）

P502　柱根断割（北から）

P503　柱根断割（北から）

SD501　（西から）

SD502　セクション（東から）

調査区南端木製品出土状況（東から）

調査区南端下層溝状遺構（北から）

調査地点近景（北西から）

調査状況（機械掘削）

調査状況（遺構検出）

調査状況（遺構実測）

調査状況（現地指導１）

調査状況（現地指導２）

調査風景（太市小学校見学）

調査風景（現地説明会）

50

52

51

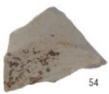
53

55

57

56

W2


54

62

61

60

58

59

S1

出土遺物

T31

T32

T33

T34

T35

T36

T38

T37

出土遺物

T39

T40

T41

T42

T43

T44

T45

T46

T47

報告書抄録

ふりがな	ひょうごけんこだいかんどうかんれんいせきちょうさほうこくしょさん
書名	兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅲ
副書名	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第494冊
編著者名	篠宮正、織英記、池田征弘、パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 ℡079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 ℡078-362-3784
発行年月日	平成29（2017）年3月31日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 ℡079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	道跡番号					
向山遺跡	姫路市太市中	28201	020085	34°51′34″	134°36′3″	20140204～0222（2313150）	53	試掘・確認調査
						20141205～1225（2014098）	126	
						20151015～1111（2015122）	106	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
向山遺跡	官衙	古墳時代	土坑	須恵器	
		奈良時代	溝、土坑、柱穴	須恵器、土師器、瓦	長坂寺式軒瓦
		平安時代		須恵器、土師器、緑釉陶器、白磁	

要約

古代山陽道大市駅家比定地である向山遺跡の確認調査を実施した。駅館院推定地点では築地塀の北辺と東辺に伴うと考えられる溝を検出したほか、駅館の礎石と考えられる石が入った土坑2カ所を検出した。

また、駅館院推定地点の北側では、古代山陽道の道路側溝の可能性がある溝とそこから屈曲して駅館院へ向かう通路のものと考えられる側溝を検出した。

遺物では奈良時代を中心とした須恵器・瓦などが確認された。須恵器には精良なつくりのものが含まれている。また、出土した瓦は軒瓦は少ないものの、播磨国府系瓦である長坂寺式が認められる。

兵庫県文化財調査報告　第494冊

兵庫県古代官道関連遺跡
調査報告書Ⅲ

平成29(2017)年３月31日　発行

編　集：兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号

発　行：兵庫県教育委員会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷：ウニスガ印刷
〒677-0054　兵庫県西脇市野村町大坪471